

鳩になって



江戸川
被爆者の証言 第3集

江戸川原爆犠牲者追悼碑の会・編



鳩になって

江戸川
被爆者の証言 第3集

■ 発刊のことばー平和の鳩となって飛びまわれ……浄園 満成	6
■ 発刊によせて……中里 喜一	8

■ 江戸川原爆犠牲者追悼碑の会一〇年のあゆみ……岡田 弘隆	11
-------------------------------	----

■ 証言

もつと早く被爆の健診が行われていたら……川口郁子	34
原爆で孤児となつて……K 初江	35
被爆前後……久保 亨	37
屍衛兵としての一週間……後関 和男	41
広島に帰つてお墓のお守りをしたい……品川 鶴代	44
南京・東京・広島……染井 教二	45
広島のカンギ……たなべまもる	50
悲しみは私だけでたくさん……堤 晶子	53
若くして逝つた夫のこと……友安 静恵	55
いまも口に出して話せない……戸山真寿美	57
もし、お姉さんについて行つていたら……中尾 嬢二	59
一枚の罹災証明書……西本 宗一	61
平和よ永遠に……松谷 幸江	65
碑の前に……持田 郁子	70
二度と戦争のない世界に……吉村美智子	71
逆流をこえて自立と連帯を……辛 泳洙	80
私の一生の願いです……李 一守	85
裸で三日位歩いておつたんです……李 貞秀	86



はとになって……川崎加寿子 92

原ばく……中山 美里 93

今、平和を考える……吉村 博光 95

滝野公園「原爆追悼碑」を見学して……伊嶋 裕一 96

平和の誓い……川俣 尚貴 97

■追悼

追悼碑に眠るひとびと 100

平和の祈り……澤 正彦 102

さようなら、田部さん……銀林美恵子 104

お母さん、ご苦労さまでした……田部 和彦 106

友安さんの思い出……佐々木玲子 107

平山さん、安らかに……渡辺 和子 108

江戸川原爆犠牲者追悼式を知って……松川 和美 109

原爆がおとされたことを風化させてはならない……松岡 優 110

詩・河を流れているような……被爆中学生の記録による編詩 33

トモちゃん……石川 逸子 48

資料・広島・長崎の被爆 74

広島市全図 78

長崎市全図 79

世界にひろがるふたたび被爆者をつくるなのねがい 90

■江戸川原爆犠牲者追悼式10年 112

あとがき 116

表紙／丸木位里・俊 表紙題字／川平永介
カット／佐藤祝子・染井教二・森永友司

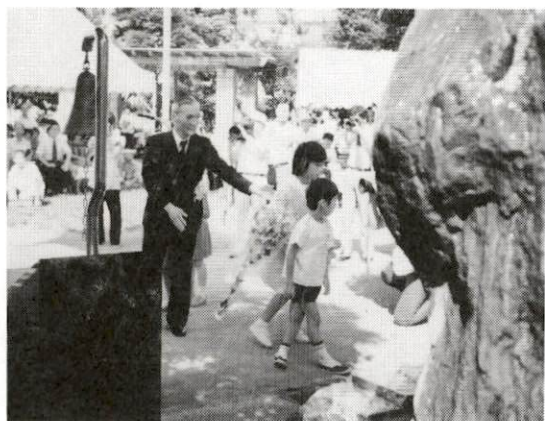
発刊のことば

平和の鳩となって飛びまわれ

親江会会長 浄園満成

人類史上最大の惨劇の日から、今年は四五年目となります。反核・平和推進の世界的名画伯丸木位里・俊先生ご夫妻のご支援もあって『鳩になって』の証言記録集第一号は、一〇人の編集委員の諸先生方の献身的なご奮闘で立派なものに仕上げて戴きました。編集を終えての小林功先生のお言葉が、いまさらながら身に浸みてきます。今年第三号です。一号から三号までの八年間に、次々と帰らざる旅路へと先立たれた同志の方々。無常迅速の感は私たち被爆者にとって、ひとしお深い悲しみを誘います。

さて、時は青葉若葉の季節です。街路樹の生まれたての若葉が風にそよいで、「いま、ここに生きてるよ」と喜びに踊っているかのように見えてきます。この生命（いのち）の美しい輝きが、いつま



でも失なわれることのないようにと祈る気持ちです。

ところが、今年は寒暖常ならず、新聞などでは、猫の目天気で異変続きの気象だと騒いでいます。人間の自制心を忘れた欲望が、山を削り、森林を焼き払い、川や海を汚染し、硫酸酸化物や重金属混りの空気で人間の呼吸すら困難になる所があるとか。先日、衛星放送で放映されたソ連の中国国境に近いセミパチンスク核実験場では、五〇〇回を超える核爆発実験により、ここに住んでいた被爆住民は「故郷には鳥も飛ばず、草も生えない」となげいていました。農・漁業に悪い「エル・ニーニョ」現象も今年末には発生しそうですか。

とにかくこのままでは、地球が危ない。官民あげて、次代への安全な地球引き渡しに責任を持つべき時です。ほんとうに。

遅まきながら、世界環境会議や、民間や政府筋の環境対策も、最近、真剣味が見えてきたようです。

本号が、平和の鳩となって、日本といわず、世界中を飛びまわることを同志と共に心から祈っています。

発刊によせて

江戸川区長 中里 喜一

広島・長崎に原爆が投下されてから早や四五年、平和と繁栄の蔭でとかく薄れがちな原爆の悲惨さ、戦争の悲劇を子々孫々に語り伝え、平和への誓いを新たにしていこうという証言集『鳩になって』第三号が発刊の運びとなりましたことは大変意義深いことです。

本区においても、昭和二〇年三月の東京大空襲で多くの被害を受けましたが、その惨状は決して忘れることができません。犠牲者やご家族の悲しみ、無念さ、そして平和を願う気持ちには、痛いほどよく分かります。

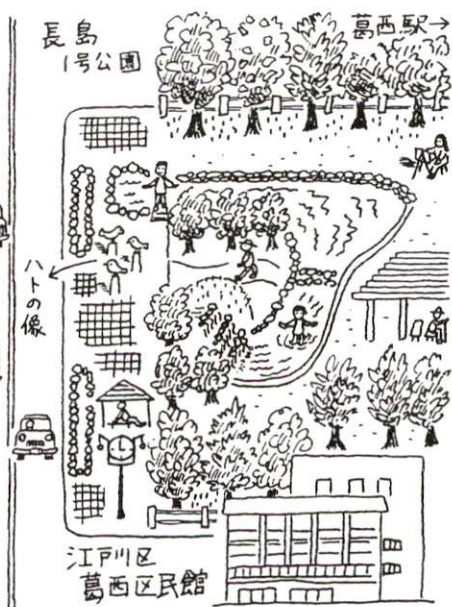
今年は滝野公園に原爆犠牲者追悼碑が建立され、追悼式が行われるようになってから一〇年目を迎えますが、毎年、被爆者の皆さんやご家族の悲痛な体験をお聞きますと、改めて人の生命の貴さを



痛感し、この地球上に絶対に戦争があってはならないという思いを強くいたします。

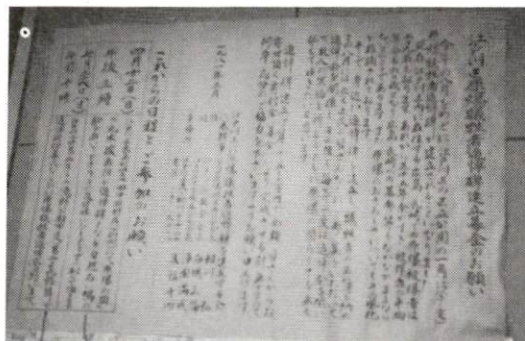
また去年は、原爆ドームと同じ運命を辿った小松川の旧区役所文書庫を、平和のシンボルとして保存する工事を行いました。さらにその隣りには、いま「世代を結ぶ平和の像」の建立計画が着々と進められています。これらはすべて江戸川区民の平和を願う総意です。もとより、世界の平和は人類共通の願いです。しかし、それは単に戦争を無くすことだけではありません。お互いに相手の立場を思いやり、幸せを願ひ合い、人生を価値あるものにしていくという豊かな人間性こそ平和の根幹ではないでしょうか。

わが国の平和と繁栄は多くの貴い犠牲のうえに築き上げられてきたことを機会あるごとに思い起こし、平和な人類社会を築き上げ、それを次代に引き継いでいくため、この冊子が大きな役割を果たすものと確信しております。



「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」一〇年の歩み

岡田弘隆



建立にこぎつけるまで

日本一の被爆者の会があつて

正直なところ、追悼碑ができあがつて二、三年目ころは、東京の各地や、その他、全国各地に、江戸川区に似たような原爆犠牲者の追悼碑ができていくものと考えていました。ところが、この一〇年目を迎えてみて、どうも初めの予想とはちがひ、どこにも似たようなものができてこない。

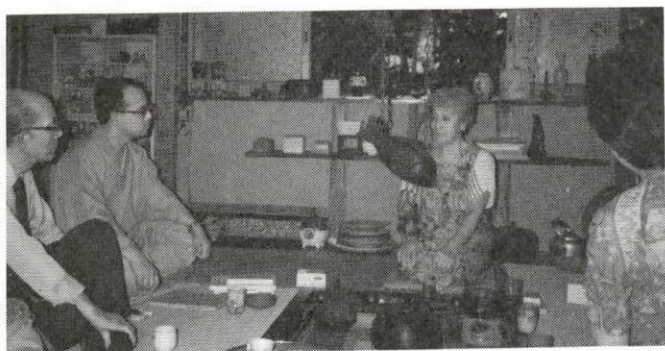
そこで、どうしてなのかと考えてみたわけです。

よそにできずに、江戸川区にだけできたのは、何故かと。

そうすると、なんと言っても、思い当たるのは、江戸川区の被爆者の会が、全国一を誇れる温かな、強固な地域組織だったということが、先ず一番の理由であつたのです。その被爆者の会が、ほかならぬ親江会で、一〇年前は、相川弘さんが会長でした。

次に、人のご縁の不思議な結びつきに思い当たります。親江会の現在の会長の浄園満成先生は、元江戸川区中学校長会会長であられました。北葛西の安楽寺の伊藤説翁住職は、この浄園先生と同じ中学校に勤めておられたことがあり、また伊藤さんは被爆者の方々にお知り合いが多いご縁の持ち主でした。

そんなご縁によって、一九八〇年二月一六日、その安楽寺で最初の会合がも



たれ、それから八回ほどの会合が重ねられました。

親江会からは、いつも相川会長が、梅沢武次事務局長代理、銀林美恵子副会長、西岡六三事務局次長、堤久吉さんなどが、また義父さんが熱心な被爆者運動家であった杉原博子先生、それに真福寺住職の羽生雅則さん、もちろん伊藤さんとその他、数名の方々が相談しました。

一九八一年夏は、仏教式に言うと、敗戦から三七回忌という年でした。

そこで、一九八一年夏をめどに、被爆犠牲者を追悼できる碑か、平和像かを建立して、思想、信条、政党政派を越えて、平和の誓いのできる追悼行事を行い、以後は、毎年、追悼行事を続けて、被爆と戦争体験を風化させないように、と話し合われました。

この話は、途中から、銀林さんのご縁で、「原爆の図」の作者として知られる丸木位里・俊画伯にご協力いただけることになり、一九八〇年八月には、埼玉県東松山市の丸木美術館に丸木画伯夫妻を訪ね、自然石に下絵を画くから、みんなで彫ったかどうか、という話に発展していきました。

区長が公園提供、建立する会の発足

一九八〇年一二月一五日には、当初の会の名称であった「江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会」の設立総会が、開かれることとなりました。

江戸川区原爆犠牲者追悼碑建立募金のお願ひ

今年の八月をめどに、江戸川区の区立公園の一角に（予定）原爆犠牲者追悼碑が建立されることになりました。

現在江戸川区内に在住する広島・長崎での原爆被爆者は二〇九名もおります。あれから三五年余がすぎ被爆者の平均年令も六〇歳となり広島・長崎への墓参等もなかなかままならないのととであります。また、原爆のおそろしさについてもその風化が指摘されております。

そこで身近に追悼碑を建立し、犠牲者の名簿を納め、この八月には広く区民の皆さんなどにご参集いただき追悼会を開催し、その後も毎年一度は追悼会を開いて、故人の冥福を祈るとともに原爆の恐ろしさも永く伝えてゆきたいと思ひます。

追悼碑建立予算は五〇〇万円で、金額皆さんからお寄せ頂く寄附金（募金）により完成させる計画ですので、何卒応分のご協力を下さいますようお願い申し上げます。

募金をご送金下さる場合は、左記宛にお願い致します。

記

江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会

代表幹事（江戸川区原爆被害者の会会長） 相 川 弘

同（江戸川仏教会会長） 西 城 正 倫

同（江戸川区中学校長会元会長） 淨 園 満 成

様

(賛同者・順不同敬称略)

中里 喜一 (江戸川区長)

高橋 治巳 (江戸川区労協議長)

梅沢 武次 (江戸川区原爆被害者の会副会長)

中村 伸之助 (江戸川区職労委員長)

銀林 美恵子 (同)

副会長)

井上 正平 (江教組委員長)

西岡 六三 (同)

副会長)

木内 俊夫 (弁護士)

澤 正彦 (小岩教会牧師)

佐藤 幸雄 (同)

花島 順一郎 (東京シオン教会牧師)

市川 高義 (江戸川生協理事長)

山田 璋俊 (江戸川仏教会副会長)

今泉 清 (「下町タイムス」発行人)

清水 惠隆 (同 副会長)

近藤 徹 (江戸川高校教諭)

人見 哲為 (江戸川法曹会会長)

深谷 静雄 (私教連東地協議長)

銀林 浩 (明治大学教授)

外約九〇名

(江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会・事務所)

〒132

江戸川区東小松川二一七一七 泉福寺内
電話 六五二一九四二八



追悼碑建立予定地

そこで、この発起人会の前に、これまでの会合の趣旨をお話してご協力いただくために、相川会長と伊藤安楽寺住職が中里喜一江戸川区長にお願いにきました。すると、中里区長は全面的な協力を約束してくださったばかりでなく、区立公園を建立場所として検討しましょう、とまで話してくださったのでした。

それまで、建立場所については、最終的には区内のお寺もやむをえないと考えていたのです。しかし、被爆者にも、追悼する側にも、様々な宗教や信条があるので、特定の宗旨の寺ではないほうがよいかと、じつは頭を悩ましていたのです。その悩みが区長の公園提供の話で、一挙にすばらしい方向へと解決に向かったのです。

いま思いますと、事実として、この時の中里区長のひらめきの一言が、その後、立派な追悼式が、一〇回を重ねるまで続いてきた根源の一つになっているものと思われます。

こうして、一二月一五日の設立総会も、大成功となりました。

設立総会では、将来に向けて、会の目的を次の三つと確認しました。

目的① 原爆犠牲者追悼碑の建立と将来にわたっての維持。

② 毎年夏の追悼式の開催。

③ 核兵器廃絶のため原爆被害の恐ろしさを永く伝えていくこと。



あけて一九八一年一月四日、江戸川区の担当公園課長などとの話し合いで、区立「滝野公園」なら何坪でも使って結構ですよ、と勧められ、追悼碑は「滝野公園」建立と決まりました。

追悼碑の鳩になった母子の図とノミ入れ式

追悼碑は、自然石に、丸木位里・俊画伯が直接下絵を描いてくださることになりました。

一九八一年四月一二日午後三時、碑の建立を依頼した葛西の田中石材店の店先に据えられた四国産の縦、横ともに約二メートルの緑色の自然石のまえに、親江会と建立する会の関係者が六〇余名ほども集まるなか、筆先に墨をたっぷりと含ませた丸木俊さんが石の中央に母子の絵を描き、続いて丸木位里さんが母子を中にして大きく鳩の絵を描き、最後に、鳩に一輪の花をくわえさせました。画き終わると、息を殺して見守っていた人々から、いっせいに拍手が起きました。

それから、丸木位里・俊夫妻と、建立する会代表幹事の西城正倫江戸川仏教会長や区労協の高橋治巳議長、相川さん、銀林さんなどが、いきさつを説明して挨拶をしました。

挨拶しているうちに、墨が乾いてきました。そこで、当日の参加者がめいめ



いに鋼のノミとハンマーを握って、鳩と母子の絵のそれぞれ好きなところの石をひとノミずつ彫って、ノミ入れ式を行いました。

この日から、四〇日間ほどかけて、多くの方々がこの石を彫りに通い、五月二四日に、彫りあげた鳩と母子の絵に色を塗りました。鳩は白、母子は朱色。これも丸木さんの指定による色でした。

塗り終えてみると、みごとに石から絵が浮きあがり、本当に母と子が鳩になって飛んでいるように見えるのです。

説明が遅くなりましたが、この「白い鳩の中に朱色の母子の図」の意味は、「広島・長崎で被爆して犠牲となった母と子が、鳩になって世界中に平和を訴えて飛んでいる姿」をあらわしたもののなのです。

募金と除幕式の準備

この間、四月二日には、中里区長から滝野公園建立につき、正式の決裁をいただき、四月六日には、区議会議長と各党派幹事長に追悼碑建立につき協力を要請し、協力の了承をえました。

こうして、区民と区内外の広範な方々の協力のもとに、四月の末には建立資金についての募金の勧募がスタートしました。

募金にあたっては、さらに追悼碑建立の意義を広く訴えて歩きました。

7月26日(日)、除幕式。皆様のご参加を！



平和への願いを
幅広の募金で建立

病者は二百五十名、命を失つたのは僅く
症に悩んでいゝます。この症候群は、

その縁故、親戚、知友への宴會を断り、ゆづの酒を、こゝろ
をも亦く伝へていこうとするを志す。此の傳へ
てこえた多くの古々の眞實によつて、そのこゝろの建
（是は凡木、面田夫妻）は、移り居る地への戀いの
結晶でもあり、また、時空に於ける一瞬間でもあり、

日四 七月二十(日) 午後一時

內容 附原式、試列各全解

唐 王 維 詩 集 卷 之 一

自毛澤東逝世後，

卷之四

此編長 六丈四寸六分
書と御出所の平足、

附錄 1. 1983年12月調查資料

理江子之念 八事

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

Copyright © 2004 by John Wiley & Sons, Inc.

特に区内の教育関係者の理解をうるために、江戸川区教育委員会の委員長と教育長に要請して建立への協力をお願いし、了承をえました。また、区立小学校と中学校の、それぞれの校長会と教頭会にお願ひし、当時現職の校長先生と教頭先生全員に署名と募金の協力をいただいて、一三万八〇〇〇円のご協力をいただきました。その他、区立幼稚園・保育園を含めて、一般の先生方の募金も五〇万円を越えました。

建立以後の例年の追悼式に、区立の小学校・中学校の児童、生徒さんら多数が、学校ぐるみで千羽鶴を折って参加する姿がたえませんが、その出発点は、このような区内の教育関係者のこぞっての協力があつたからでした。このような事實は、江戸川区の教育関係史のうえからも特筆される出来事だったと言えるでしょう。

募金に協力してくれた人の数は、全部で区内外の二〇〇〇人以上に及び、募金総額は、四四二万円余りに達しました。また、江戸川区社会福祉協議会からは一〇万円の助成金をいただきました。

こうして募金を進める一方、追悼碑の建立工事も梅雨のなかで進められました。

追悼碑は、区立滝野公園の南西の隅の一角に、碑に向かうと広島・長崎の方角に思いをはせるように建てられています。



追悼碑の本体は四国産の青石ですが、台座や建立の言葉を記した誌石には、アフリカ産黒御影石が使われ、また台座には水がたたえられるようにできています。水を求めて亡くなられた原爆犠牲者の苦しみを、少しでも和らげてあげたいとの多くの被爆者の心情をくむ設計がなされたのでした。

追悼碑は、国の内外の総ての被爆犠牲者を追悼し、平和を訴えるために建立されたものですが、特に、区内被爆者に縁故のある被爆犠牲者の名簿が奉安できるように設計され、毎年、名簿に関係犠牲者の書き加えと、奉読が行えるようになっています。

追悼碑正面の、「原爆犠牲者追悼碑」の文字は、広島の被爆者、親江会の相川会長が、また建立の言葉を記した誌石の文字は、長崎の被爆者、浄園先生（現親江会会長）が、それぞれ記念に揮ごうされました。

その除幕式を兼ねた第一回の追悼式は、一九八一年七月二六日（日）午後二時からと決まり、前例のない追悼式の準備が進められました。

追悼碑を除幕して第一回追悼式

感激の除幕式

一九八一年七月二六日は、快晴にめぐまれ、朝早くから会場設営の準備が進められました。設営には建立する会に集まるボランティアの方々多数とともに、



区役所の公園課から職員が出て、防災用の大型テント二張りをはじめ、マイク放送設備その他の設営も行われ、このような民間と区役所との追悼式設営の協力関係は、以後、今日まで変わらず続けられてきている前例となったものでした。

打ち上げ花火の音とともに、五〇〇人ほどの参加者の待つ滝野公園に、中里区長も到着され、午後二時ちょうど第一回の追悼式が始まりました。

相川会長の開会挨拶に続いて、追悼碑の除幕が、中里区長、被爆二世の堤英樹君と永田千春ちゃんの手で行われました。

それまで碑を包んでいた白布が引き落とされると、白い鳩に朱色の母と子が描かれた追悼碑が現われ、参加者の感激のざわめきのなかを、白鳩がいつせいに飛び立ちました。

除幕に続いて、経過報告が行われ、次に犠牲者名簿の奉読奉安、犠牲者への黙禱が行われました。

追悼式では、続いて各界からの挨拶を受けることになり、中里区長、区議会議長、伊東壮日本被団協代表委員、丸木位里・俊夫妻、西城仏教会会長、区労協高橋議長の挨拶が行われました。

続いて、親江会の会員による被爆体験の発表が、広島・矢部キヨ子、長崎・中山鈴子の両氏から証言され、参加者に衝撃を与えました。



そのあと、千羽鶴の献納が行われました。千羽鶴は平和の象徴です。この千羽鶴を区立の小学校や中学校、公立・私立の保育園で、学校ぐるみやクラスぐるみなどで折って、先生引率で子供たちが参加します。また、その他、地域子供会や多くの団体、個人が千羽鶴を犠牲者にあげるために参加し、仮設の千羽鶴かけはたちまち満杯になりました。

千羽鶴のあとは、参加者全員による菊の花の献花です。追悼碑には背後から臨時の噴水がかけられ、仏教会による読経とキリスト教界によるお祈りのなかを、献花が長い列をつくって行われました。

献花のあとは桐笛の吹奏です。この桐笛というのは、丸木夫妻から記念に贈呈された笛で、なんでもその昔、東北の山村で、農民たちが一揆を起す際にホラ貝の代用として使われたものだそうで、桐の若木をくりぬいて作られているものです。この桐笛は、犠牲者への追弔と追悼式へのより多くの方々の参加を願う意味をこめて、はじめに丸木俊さんから、続いて梅沢武次さんから、吹きならされました。親江会副会長の梅沢さんは、陸軍ラッパ長として広島市宇品で被爆されながら、直後の救護にあたられたという体験のもちめしで、三六年ぶりの葬送ラッパでした。

最後は、参列者全員による「原爆許すまじ」の合唱です。

こうして、追悼式の内容としては、前例のないなかで創意をこめてこの第一



江教組の先生たちの指揮と
演奏による全員合唱

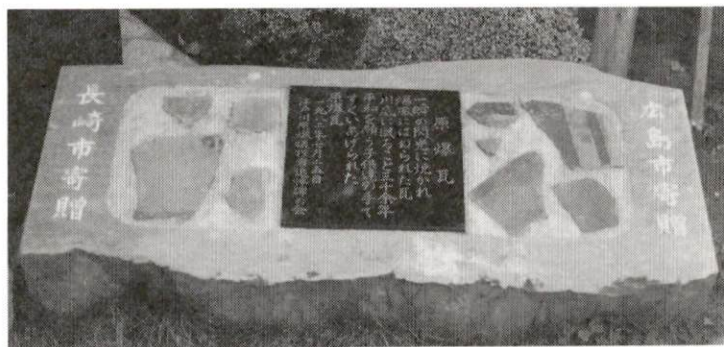
回において行われた内容が、その後も登場人物を少しずつ変えて踏襲されてきております。

第一回での開会挨拶は、区内教育界の代表として、ご自身、長崎において被爆された浄園満成先生がされました。このご挨拶は、思えば、それからおよそ二年後に、浄園先生が相川会長亡きあとの親江会の会長になられるという、不思議なご縁のはじまりではなかったでしょうか。

なお、追悼式のあとで、例年、第二部として、懇親会や原爆関係の映画会や公演会などが開かれてきております。

建立する会から、「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」へ名称変更して

このように第一回の追悼式を終えて、建立する会は一九八二年一月二五日の幹事会で、名称を「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会（略称・原爆追悼碑の会）」と変更しました。そのうえで、前にも記しましたように、①追悼碑の維持、②毎年の追悼式の開催、③核兵器廃絶のために原爆被害の恐ろしさを永く伝えてゆく、との三つの目的をかかげて活動を続けていくことになりました。



しだいに成長する追悼碑

「追悼碑が成長する」と言う日本語は、言葉としてはおかしいものですが、ことこの原爆犠牲者追悼碑にかぎっては、そうとも言うより方法がありません。普通よくある記念碑は、建立を終えてしまうと、どこかの片すみに忘れられてしまったり、またそれほどなくても、建立された当時のままで一〇年後、二〇年後に存続しているというのが、よくある例ではないでしょうか。

ところがこの追悼碑は、まるで生き物のように、この九年間に、少しも休むことなく成長してきた不思議な追悼碑なのです。この不思議な成長の記録をここに記しておこうと思います。

「原爆瓦の碑」が加わる

まず、碑建立の翌年の一九八二年には、さっそく、「原爆瓦の碑」が加わりました。

原爆瓦とは、あの日、瞬時に蒸発して影だけになってしまった人があったほどの、あの原爆の熱線で表面を焼かれて、ケロイド状にただれた瓦のことです。その瓦を、埋もれていた爆心近くの河の中から、原爆の生き証人として発掘する作業が、広島・長崎両市の子供や市民の手で、進められていました。その原爆瓦を、正式に広島・長崎両市長さんから寄贈してもらい、直接手に触れてみ



えるようにと作られた碑でした。

原爆瓦をはめこんだ台座の石は、追悼碑本体に使われた四国産の青石の下の部分で、切断して石屋さんに残されていたものを使いました。

この原爆瓦の碑が加わることによって、追悼碑はミニ原爆資料館ともなったのでした。

「平和の鐘」が造られる

翌年の一九八三年には、「平和の鐘」が追悼碑の右わきに造られました。

追悼碑を訪れる方々に、犠牲者への追弔の意味を込めつつ、平和への願いを託して鳴らしていただこうと造られ、また追悼式では、黙禱の間、毎年、打ち鳴らされてきました。この平和の鐘を造るために、区内外で広く募金を呼びかけましたところ、金七八万円余りが寄せられましたことを記しておきます。

広島・長崎両「市の木」の植樹

その後一九八五年には、広島市から「くすのき」と、長崎市からは「なんきんはぜ」の、両方の「市の木」が贈呈されて、追悼式のなかで植樹式が行われました。このように両方の市の木をいただくことになりましたのは、それ以前に、江戸川区から両方の市に、親江会の代表を通じて、「江戸川区の木」が贈られて、それぞれの平和公園に植えられて大きく育っているからでした。

原爆瓦と言い、この「市の木」と言い、江戸川区と被爆両市との関係は、こ



うして特別にご縁を深めてきたものと思われます。

追悼碑の周囲に念願の「噴水」

追悼碑の周囲に噴水が欲しい。水を求めて亡くなられた原爆犠牲者を思うと、どうしても噴水が欲しい。この願いは一九八六年から出ていたのですが、一九八六年の六回追悼式を終えてから、中里区長さんにお願ひしたところ、検討しますから計画原案を考えてみなさい、と言われたのです。それから原案と言っても、どうしたら良いやら困っていますと、不思議に、日本でも代表的な噴水メーカーにご縁ができ、一九八七年秋に、原案として三案を出してもらいました。

この三案を区にお話して、とうとう念願の噴水が、それも当初の願ひよりは立派なものとして、一九八八年七月の追悼式にまにあうように完成したのでした。

しかし、残念なことは、噴水設置を強く念願された堤久吉さんが、この前年の七回追悼式直前に、浦安市で被爆体験の証言中に倒れ、間もなく帰らぬ人となられたことでした。堤さんは、親江会の事務局長として、区内被爆者の家庭訪問活動をはじめとして熱心に活動されてこられた方でした。碑の会では、堤さんの熱心な活動をしのいで、追悼文集を噴水設置にあわせて発刊したのでした。



なお、噴水の水は循環式で、一日に二回、二時間、追悼碑に水をかけるようセッティングされています。

追悼碑が生み出しているもの

被爆体験発表から証言集の発行へ

区内被爆者を代表して、毎年、広島・長崎の被爆者お二人に、追悼式の中心的行事として、被爆体験の発表をしていただいております。

この被爆体験の発表は、参加者にとって毎回大きな衝撃であり、そしてまた、核兵器の恐ろしさを生の体験によって知りうる貴重な機会になっているのです。この貴重な証言を、ぜひ、追悼式参加者だけでなく、より多くの方々に知らせたいということから証言集が生まれました。追悼碑の会の目的の③は、核兵器廃絶のために原爆被害の恐ろしさを永く伝えていくこと、となっております。この会の目的を実現するためにも、被爆者の証言を本として出版していくことは、大切なことです。

そこで、一九八二年に、「鳩になって・江戸川被爆者の証言」が発刊され（現在、絶版）、一九八四年には、「鳩になって・江戸川被爆者の証言 第2集」が発刊されました。第2集は残部があります。

一九八八年には、前記のように、親江会事務局長であった堤久吉さんの「追



悼文集」を発刊しましたが、これも実質的に江戸川被爆者の証言集の意味あいをもつ出版でありました。この追悼文集も、現在、残部がございます。

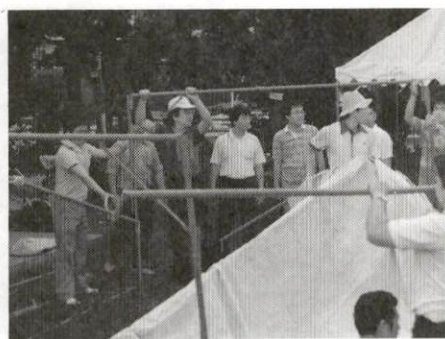
そして、今年、いよいよ一〇回目の追悼式を迎えるにあたり、「鳩になって・江戸川被爆者の証言 第3集」を発刊する運びとなっています。

毎回の出版に原稿を寄せてくださった被爆者をはじめ多数の方々、また困難な編集の仕事を奉仕でしていただきました編集長と編集委員の皆さんに、この機会に感謝を申し上げておきたいと思います。

奉仕でなりたつ追悼碑の会

奉仕ということでは、なにもかにも追悼碑の会の諸活動は、いわゆるボランティアの活動によって支えられてきました。

追悼碑建立のときから、その追悼碑の清掃を日課としておられる高木留男さんには、本当に頭がさがります。高木さんは親江会の副会長として活動されながら、碑のわきの掃除道具入れ物置のカギを持って、毎日のように清掃を欠かしません。風邪などで熱を出したりしても、責任感から清掃に訪れる高木さんですが、願いの一つは、追悼碑を子供たちがよごさないこと、もう一つは、清掃を区が引き受けてくれることです。犠牲者の追悼碑がよごれたままになって一日でもあることは、被爆者にとっては耐えられないことです。高齢の被爆者



に代わって、区の手で碑の清掃が行われるようになることを願うものです。

ボランティアでは、その他、例年の追悼式の準備や資料集の作成と、当日の会場設営や諸々の係、また終わったあとの片付けと、江戸川区の公園課の支援のもとで、大部分が奉仕として行われています。

その中心には、いつも親江会の会員の方々がおられますが、その他、毎回の追悼式では、区内の民間労働組合の方々、区職員組合の方々や小・中学校の先生方には、夏の暑い日差しやどしゃぶりの雨のなかを、汗を流し、重いテントやテーブル、イスなどの手配をしていただいております。

一〇回目を迎えて、今年は、江戸川区音楽協議会のご協力により、「江戸川平和コンサート」を、追悼式のあと引き続いておこなえることとなりました。これに出演する江戸川フィルハーモニーオーケストラ、江戸川少年少女合唱団、女性コーラス・グループ四団体、また特別出演のオーボエ独奏の似鳥健彦さんなど、区内の音楽家の皆さんが、奉仕で出演をお引き受け下さいました。これはじめての「江戸川平和コンサート」も、これを機会に将来も続いて開催され、内容も発展していくことを、心から願いたいと思います。

こうして、被爆者と追悼碑を中心にして、核兵器のなくなるまで、また被爆者援護法の制定までの思いで、広範な区内外の皆さんがボランティアとして奉仕していただいております。これからも引き続きご奉仕をお願いしたいものと



世田谷の被爆者たち

願っております。

追悼碑を中心としてひろがる波紋

こうして、追悼碑の会の一〇年の歩みを、後半はとくに急いで、振りかえってみました。広島・長崎ならいざしらず、この江戸川区の地で一〇回もの原爆犠牲者追悼式が開催されてきたことは、まことに不思議なことではないでしょうか。

国の内外のすべての「原爆犠牲者への追悼」という、この追悼碑にかかわる皆さんの誠の心を通じて、平和な世界へ心の交流が深められてきたのではないかと思います。

中里区長さんは、追悼式だけでなく、建立の年以来、毎年八月一五日の終戦記念日にも、区の幹部職員多数を引き連れてこの追悼碑を訪れ、平和への誓いを新たにしております。

また、区内で行われる平和行進などの様々な平和への取り組みにあたっても、この追悼碑は出発地になったり目的地になったりして、区内外の方々に知られるところとなっております。

ときたま遠くから被爆者が訪ねてきたり、高校生が被爆体験を聞きに訪ねてきたりすることもあります。これまでに韓国の被爆者が訪ねてこられたことも



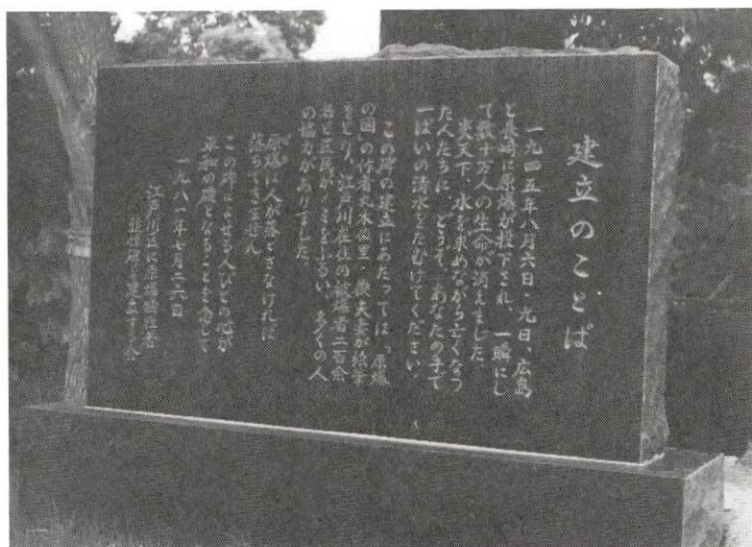
ありましたが、今年の一〇回の追悼式を機会に、韓国原爆被害者協会の辛泳洙（シン・ヨンスウ）会長が、来賓として参加され、被爆体験を証言されることとなりました。

これからも、この不思議な追悼碑と追悼式を、将来にむけて永く伝えてゆけますように、追悼碑の会は、三つの目的に添って活動が続けていくことでしよう。

どうか、皆さまには、追悼碑建立のいきさつとその後の経過をご理解いただき、ご健康に留意されつつ、一層のご支援を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

（江戸川原爆犠牲者追悼碑の会事務局長）





証 言

「河を流れているような」

被爆中学生の記録による編詩

水をくださいや おがみます
死んでもよいです くださいや
あゝ／＼ からだが 焼けるよう

いつまで待てば よいのかの
何処までゆけば よいのかの
河を流れて いるような

ぼくを起こして くださいや
ぼくのからだは ぼくの手足は
どんな かたちになってるの

だれがぼくを こんなにしたの
このままぼくは死ぬるんだろうか
もう 暗い夜だね

電車へのつても よいのかの
電車へのせて くださいや
母さんそこへ 帰りたいな

母さんそこへ 帰りたいな

もつと早く被爆の健診が

行われていたら

川口郁子

(長崎、親江会だより
一〇一号掲載)

当時、私は女学校(長崎市立高女)三年生でしたが、学校の体育館は、旋盤を扱う工場になり、女学生も挺身隊として働かされていました。

私はその二、三日、体の調子が悪く、学校を休んでいる時でした。八月九日の朝、もう熱も下ったので、自分では一日でも多く休むのは悪いから、出かけようとしたのですが、母のもう一日養生するようにという説得で、申し訳けないと思いながら家にいました。

母と庭でそら豆を干していた時、突然ピカツときて、防空ごうにとび込んだ途端に、ドカンと来ました。夜になってから、長崎の惨状がつぎつぎと伝えられました。私の姉は少し離れたところに嫁いでいたのですが、その夫、私の義兄が、私を探しに町に行ってくれたことを後で知りました。また、すぐ近くに、てる代さんという友だちがいたのですが、お父さんが探しに行かれ、彼女は、翌日ボロボロになって帰って来ました。彼女の隣りにいた人は即死だと聞いています。

しばらくしてから、私は学校へ行きました。同級生の中に、やけどやけがの人たちがいました。耳がケロイドで変形した人、足をひきずった人もいました。あの頃の子どもは、そのことにあまりふれようとせず、何も言わなかったけど、年頃になって、どんな思いをされたことだろうと、心を痛めています。

父は、五九歳、原因もわからず、老衰のような

感じて死にました。その頃、被爆者の健康診断はまだなかったので、何もわかりませんが、今考えると放射能の影響だと思っています。父は市内に勤めていて、その後も市内を歩きまわりましたから。

その後、母は胃ガンで亡くなってしまいました。

それまで家系にガンの人はいなかったで、これも被爆のせいだと思います。

もっと早く、被爆者の健康診断が行われ、治療がすすめられていたら、父も母も、もっと長生きできたろうにと思います。



原爆で孤児となって

K 初江（広島）

私の幼い頃の記憶は、若草学園に始まります。そこは広島尾長町にある修道院です。私は、原爆で一人ぼっちになり、稲荷町の葡萄（ぶどう）畑にいたのを助けられ、トラックで若草学園に運ばれたそうです。その時、自分のことを「ハッチャン」と言っていたそうで、初江と名付けられ、年齢も推定で、昭和一四年生まれとされました。

まもなく、似の島にある孤児収容所におくられました。私たちは「にのしま学園」といってましたけど、その頃有名な「二四の瞳」のロケが似の島であり、私たちも、芋掘りの場面をカ

メラにとられました。また、ニュージーランドに養女として連れていかれたこともあります。土地になじめず、日本に逃げ帰りました。大人のスカートの陰にかくれて。

それからさらに何年かして、西条に移され、この施設で長くお世話になりました。一家庭一五人の子どもに、夫婦の先生がつき、お父さん、お母さんとして面倒をみてくれました。男の子の家庭が四つ、女の子の家庭は二つで、私はその一家庭にいたわけです。クリスマスや何かのお祝いの日は、いろいろもらったりしたけど、ふだんの生活はそれはきびしいものでした。一日の食費が四〇円そこそこでしたから、食事は粗末なんだんごだけで、おやつは小さなビガーという飴だま二つという毎日でした。学校にも行かれず、自分たちで畑を耕したり、農家に手伝いにもでました。集団で逃亡しようとしたこともあります。私はがき大将で、先生にも随分迷惑をかけました。でも楽し

い思い出もあります。操り人形芝居をやったちこち回ったことや、卓球の試合など。

一九歳になって、その西条学園から、豊田郡の大きな田舎の家に養女として行かされました。格式の高い家でしつけはきびしく、広い家の掃除、何反もあるみかん山の手入れ、年寄の世話があり、その上、家族から泥棒よばわりされたこともあり、耐えきれず、西条に逃げ帰りました。

でも、ある年齢に達したら施設にはいられないということ、広島島の西蟹屋町にある「三つ星製菓」に、住み込みで就職しました。その時、一人で淋しかったんです。よく考えもせず、そこで知りあった人と結婚し、子どもも生まれましたが、うまくいかず別れました。それから、基町のスラム街で暮らしたこともあり、随分ずさんだ生活もしました。

東京にきて、二〇数年になります。いろいろ

苦勞をしました。数年前に病に倒れ、今も肝臓と脳神経を患っています。ときどき頭がぼおーっとして、ものもいえなくなり、なさけないです。意識不明で倒れていることもあり、近所の人にも迷惑をかけています。

私の親らしい人のことがわかり、昨年、広島へ墓参りに行ってきました。靖国神社にも祀られている兵隊だったようです。もしその人が私の父だとすると、その奥さん、私の母は、戸籍謄本によると、再婚していて、その後、亡くなっています。私は捨てられたのか、と母を恨んだ時期もあります。もう親のことはどうでもいいと思っています。本当のことはわかりませんもの。私にとって「ただいまー」と言って帰れる親のところは、お世話になった先生のいる西条学園だけです。



被爆前後

久保 亨

(長崎、89・7・23)
追悼式で発表

長崎で被爆しました、久保でございます。私の被爆体験をということですが、この体験は他の被爆者の皆さんと同様、思い出したくない一つでございます。

むごく、辛く、虚しく、悲惨で、悲しく、また苦しい思いが、まだ胸深く突き差さっているからでございます。

でも、むごく、辛ければ辛いほど、唯一の被爆国の被爆者として、悲惨な原爆のことを語りつぐ義務があるかと思っています。

私は、昭和二〇年四月、徴兵検査を受けました。一年繰り上げの一九歳でありました。そして召集

令状がきました。昭和二〇年七月です。「防衛召集」といって、軍服も階級も小銃もない軍隊で、翌日から、スコップとツルハシで穴掘り作業が始まりました。長崎の東の山茂木町田上で、塹壕をつくることでありました。長崎に敵が上陸する、それを肉弾でむかえ打つ、そういう想定での穴掘り作業でありました。長崎が戦場になる。敵兵が上陸、戦車が火を吹く。「一体どうなるだろう」、上官からの情報がないだけに、大変なことになるのでは、と仲間と小さな声で話し合っていました。そうして二週間の召集を終え、田上の山を下りました。

そうして運命の日、八月九日、朝からアブラゼミの鳴く暑い日でした。お昼の仕度で、七輪をバタパタ火を起こしていました。突然、北の空（浦上方面）に、青より白に近いマグネシウムの爆発がありました。白閃が空を走りました。本能的に家の中心部に逃げこみ、身体を隠しました。バリ

バリ、メリメリ、爆風が家の中を通り抜けました。遠い空で、「ゴーゴー」と山々にこだまする爆風音が、長く続いたように思います。しばらくすると、あたりは静かになりました。恐る恐る目をあけると、海底での視野のようにすべてがぼんやりしていました。黒い空がすこしずつ見えてきました。瓦や天井は吹き飛ばされ、私の身体は廃材に埋もれ、梁が目の前に斜めにありました。家をまたぐような大鬼が両手で、そこらあたりを打ちこわして逃げたのでしょうか。強い衝撃で、何が起ったのか、どうなったのか、何が何だかわけが分かりません。廃材に埋もれ、心は焦りますが、身体は自由になりません。早く逃げ出し、自由にならなければという思いが頭をかすめました。家具など少しずらして空間を作り、這い出しました。当面の目標の防空壕は、視界の中にありましたが、真っ直ぐには進めません。右へう回して五メートル位のところを、二、三〇分もかかったでしょう

か。廃材の山を無防備の素足です。防空壕は、空き地の一角にありました。しばらくして、写真屋の方から火の手が上がり、次々と一帯にひろがり、悪魔の炎は止まることを知りません。自分の家が焼けるのを、ただぼう然と眺めているだけです。魂が抜け、ふ抜け同然です。

数時間後、近くの工場から戻った父と無事を、喜び合いました。とにかく今夜の宿をさがさねば、「愛宕町」に行ってみようと、父が言いました。

稲佐橋を渡り、銭座町に出ました。あたりは稲佐よりもっとすごい被害です。二、三〇人の人々が座りこんでいます。性別さえ分からぬくらい、黒くなっていますが、ほとんどが女性で、半裸です。くちびるはめくれ、髪の毛は燃え縮れ、顔は真黒です。着ていたブラウスが、そのまま地肌にいれずみのような火傷になっているのです。子供のように遊んだ日光写真が頭をかすめました。「〇〇町は大丈夫でしょうか」モンペの女性が私に尋ね

ました。南山手（港の方の街）だったので、「大丈夫でしょう」、市の被害状況はよく分からなかったのですが、妹のような少女を勇気づけるためそう答えました。一緒に行きますか、少女はカブリを振りました。友だちを待っている様子でした。大波止から、長崎警察署前から県庁の坂に登りました。警察も県庁も人影はなく、夕闇に燃えていました。家から持ち出したソウメン四把を食糧として、その夜は、愛宕町の親類の家に泊まりました。その家も半壊の状態で、傾いた片隅でその日の眠りをむさぼって寝たように思います。

姉の疎開先は、西彼杵郡三重村といって長与村の山向こうで、海に接する小さな漁村でした。昨日とは逆コースで、稲佐橋の近くまでくると、二人の足は何となく自宅のあった方へと向かっていました。昨日とは様子がすっかり変わり、目印にするものはなく、道の形と焼け跡からようやく家にらしい所に立ちましたが、消炭ばかりで、何んに

も残っていませんでした。釜も鍋もやかんも、すべてが消えていました。

私たちは目的地へ向かうべく渕神社の横から、竹の久保と進みました。梁川橋に近くなりますと、足を投げ出した馬の死体。水を求めて川へ下り、その目的を達することなく河原で亡くなっている人々。水に首を突込んで昇天している人。製鋼所の横を抜けると、浦上駅に出ます。ここらあたりは平地で見通しの良いところですが、一望千里、がれきで廃墟となっていました。後でわかったことですが、ここら付近が、爆心地だったのです。瓦や家具など雑多なものが少ないところが、前の道路でしょう。道らしい所には二、三メートルおきに、燃えこげ、人間の形をした消炭が数限りなく続いています。長崎の電車は路面電車で、東京荒川線と同じ型ですが、運転席でハンドルを握ったまま、真黒こげて昇天している人。この人たちは、瞬時に亡くなった人々でありましょう。

爆心地、浦上で見た凄惨な修羅地極絵図は今も、私の脳裡に焼きついていきます。

原爆はただ一瞬のうちに、生けるものすべてを焼きつくし、破壊してしまうものでありました。動物も植物もすべてです。稲佐山、金比羅山も焼けただれ、裸になりました。

原爆は四〇数年の昔になりましたが、いまでも当時の無念の死を思うとき、胸が痛みます。思い出は、鋭く胸にさります。この思い出は、私たちの記憶は死ぬまで続くと思います。



屍衛兵としての一週間^{しかばね}

後 関 和 男

（広島、88・7・17
追悼式で発表）

このような高い壇上から被爆者の体験をお話するのは、私としては恐縮です。

いま思い起こしてみますと、先程高校生が広島での平和体験を話されましたが、その年ごろと同じ、一九歳の四月二二日に、私は広島の皆実町の曙部隊一六七一〇部隊に通信兵として入隊いたしました。ところがその当時は、もうサイパン、硫黄島、アッツ島で玉砕するという戦況でして、私たち新兵は、毎日スコップをもって、ざんごう掘りとか竹やりの訓練でした。

そんな中での八月六日の朝です。いざ出場と自分たちの準備はととのっていました。その時、空襲警報は解除になっているのに、また一機来たなあ、という誰かの声が聞こえた瞬間だと思えます。まるで雷さんが百個か二百個、いっぺんに落ちたような、まばゆい光と大音響とともに、くずれた五中隊兵舎の下敷きとなり、私はどうにも体を動かすことができませんでした。となりから「助けてくれ」と言ううめき声が聞こえる。しかしながらどうすることもできない。私の頭にはいまだにハゲがありますが、その頭と足に多少のけがをしていました。足がはさまっていて、どうにも出る事ができない。ところが隣りにいた西村兵長、この人は初年兵の私が日常の世話、毛布をたたんだり、靴をみがいたりといったことをしていた人ですが、投げとばされ、いかにも無惨なことに、上から落ちたはりが西村兵長の大腿部にささり、内臓がとび出して、みるも無惨というか、やる

せない気持ち、悲しいやら、恐ろしいやら、どうにもなりません。こんな中で、人を助けるには、先ず自分がここから出なければならぬと思つて見ると、かすかな明りが見えた。あそこへ行けば出られるんだと思い、私は同年兵の助けをかりて、ようやく脱出することができました。

それから、多分、上司の命令だと思ひますが、「歩ける者は、早くけが人を救出するように」ということで作業に入りましたが、道具もなしで手でやりました。夕方になり、「今日は助かった」けど、東をみても、西をみても、南をみても、北をみても火が燃えている。不安な一夜をすごしました。

それから二日目、軍隊でありましたから、多くの人たちが救いを求めて来られましたが、軍医も衛生兵もみんな被害を受けているのですから、どうしても助けることができない。本当にみじめでなさない思いをしておりました。

先程、噴水式をしていただきましたが、あの時はまさしく、「水をくれ、何とかしてくれ」という哀願、祈りの状態でした。私たちもどうかしながら、そうした患者さんの救出にあたりました。昼間、暑かったので、テントを張って夜営という形で、毛布やむしろを敷くんですけど、暑いから向こうへ連れて行ってあげようと抱きかかえると、その手の皮が上までむけちゃうんです。茶かっ色にやけた体、そおと毛布の上にねかせてあげると、苦しみもだえながら、横になったり、うつむけになると、その人がたが、ついちゃうんです。まあ気持ちが悪いというか、いくら言っても、書いても、言葉で表わせない無残な光景でした。

ここで恥を申しあげるわけですが、三日目のと、重症のかたばかりの収容に当たっていたとき、大阪出身の岡本君と、「来るとこまで来たんだなあ、これじゃ早く白旗をあげて降参したほうがいいんじゃないか」と話したのが、上司の耳に入り、

「原爆が落ちてなければ軍法会議ものだぞ」と言われ、それから、我々二人に対する仕打ちがありました。「お前たちは、原爆で亡くなられた人たちのしかばね衛兵に立て」というわけで、とにかく我々、医療の技術も知識もないものが、亡くなった人に番号をつけて並べました。夜も遅くなり、電気ありません。多少息のある人が動き、ずれ落ちる、そのときの恐ろしかったこと。そういう状態が一週間も続いたのです。はえがとび、うじがわき、それが生きている人間や亡くなった人の体をむしばむといった中で、私たちに課せられた、あの一週間のしかばね衛兵は、私としては生涯忘れることが出来ないと思います。

先程、区労協の議長さんから、三月一〇日の下町の大空襲についての話もありましたが、私もあの三月の空襲で親代りである叔父・叔母を亡くしておられますし、もちろん、自分の家も焼かれておりました。その時の模様もお話しするわけでした

が、時間のこともございますし、今日は主旨が違いますので、また後日、お話し申し上げますが、あの時の光景の無残なことも、言葉につくせません。しかし、もっともっと、広島での体験を私は生涯忘れることができません。またあのような戦争は、二度とあってはならないと思います。これは私たちが生きている限り、これからの若い世代に語り継いで、永遠に世界の平和のために努力しなければと思います。私もできる限り、今後ともご協力いたします。

親江会の中心的存在として活躍下さった堤さんが、昨年の丁度いま頃、亡くなられたのですが、その堤さんたちの霊をおなぐさめしながら、本当にとりとめのない私の体験談を終わらせていただきます。どうも有難うございました。



広島に帰って

お墓のおもりをしたい

品川 鶴代

(広島、親江会だより
九四号掲載)

当時、私は子供四人を連れて、広島県双三郡作木村伊賀和志に疎開していました。主人は広島市宇品の軍部で仕事をしていたのです。広島が大変なことになったというので、私は零歳の次女（利智子）を背負って、主人を探しに行きました。原爆から二、三日あとですが、まだ街には煙があがって、あちこちくすぶっていました。沢山の死人の山を見ました。主人は建物の中にいて、助かっていました。丁度その日、作業に、田中さんという人が主人の代りに行ってくれている、その人は亡くなったそうです。田中さんが身代りになっ

てくれたんですね。

知人のことですが、髪がずぶに抜けて、今も悩める縁者がいます。髪のが二、三センチメートルしかなくて、いつもとんがり帽子をかぶって苦しんでいました。若いのに、子供が二人いて「お母さん助けて」というのを置いて来たいうて、夢にまでみるほど悩んでいました。広島市内に病院に入院している筈だけど、どうしているでしょうねえ。

田舎で、年寄り二人で暮していたのですが、五年に、東京の息子ところで世話になるため上京してきました。知人も友人もないこちらの生活になじめず、二人で広島に帰るつもりでした。ろ、おじいさんが倒れました。足がはれて、原爆のあとのやけどと同じような症状で歩けなくなりました。原爆を受けたとき、おじいさんは、ゲートルの巻き方が片方だけ悪かったためだと思っています。おじいさんは死ぬまで、「お前はこの東京に

おらんと、広島に帰れよ」と言っていました。

こちらでは、息子夫婦はよくしてくれるし、病院のかたたちもとても親切です。でも、私は広島に帰りたい。広島に帰って、ご先祖さまやおじいさんのお墓のおもりをしたいと切に願っています。

南京・東京・広島

染井 教 二（広島）

私は若い頃、二度、召集を受け軍隊生活を体験しました。

昭和一六年に、一回目の召集で、二月二七日に入隊、三月一〇日の夜には、東京を発って南京に送られました。栄一六四四部隊に、衛生兵として配属されました。大東亜戦争が始まってから、上海にまわされ、登一六四四で、軍務に従事しましたが、昭和一九年に、マラリヤに罹って入院、七月三十一日には除隊になって帰国しました。

第二回目の召集は、昭和二〇年の四月でした。

その頃は足立区に住んでいたのですが、三月一〇

命令でメシを食うところ

軍隊は命令がすべてであるといえ、誰もがそうであらうと書く。だが、命令によって行うということは、命令がなければなにもやらないといけないということ、言葉としては理解できても、実際には順れるまでに相当な時間がかかる。

たとえば、午前六時に起床ということ、六時翌朝には絶対に起きてはならないのである。それ以前に起きるのは自由だと思ふのは大まちがいで、起きろという命令で起き、寝ろという命令があれば寝なければならぬのである。あるいは、休めと命ぜられたから休憩時間はなにをしていても構わないと思ひ、枕の手下れなどしていろいろなならだまになり倒される。休めという命令なのだから、なにもしないで休んでいなければならぬのである。ようするになにもしないで休んでいなければならないので、軍人勅諭でも暗記しようと思ひ、口の中でぶつぶつ言っている、何を言っているかと怒ら

れる。軍人勅諭を暗誦していきすと書え、本人は責められるつもりでいると、誰が御勅諭を暗誦しろと命じたかと怒鳴られるといったくあいである。休めということ、寝ろということも学ぶこともしてはならないのだ。こうなってくると、初任兵にとって休憩時間はなにをしていいかわからないわけで、便所へ行ってきますと通出す以外にはない。命令がなければならぬとはいけないのなら便所へも行けないはずだが、命令がなくても許可を得ればいわれて、先の軍人勅諭も、暗誦する許可を求めればよかったのである。兵士がいちいち便所へ行ってきますと所内の古警者に申告するのは、所在を明らかにしておくためだといわれているがそれは大ウソで、命令のないことを行うために許可をとりつけるのである。指揮官が命令をあげなければ、兵士はいつまでもその動作をやめなくてはできない。



『ぼくはアジアで戦争をした』（内海愛子編）から

日の東京大空襲で家を焼かれ、家内の実家がある三重県の松阪で世話になってました。焼け跡の片付けに私一人上京、罹災届をだしに区役所へ行ったところ、召集令状を手渡されたのです。家が焼けたため、郵便物が宙にういていたのです。令状では、その翌日が入隊日でした。家族に知らせる間もなく、世田谷の東京第二陸軍病院に衛生兵として入隊しました。

そして、二、三日後に、広島へ送られるのです。その軍用列車が東京を離れてまもなく駅でもないところで止まっていたのです。丁度その時、反対方向の上り列車もそこに止まり、その列車には、私の後をおって上京してくる家内と娘が乗っていたというハプニングもありました。私は気が付かなかったのですが、四歳の娘が「お父さんがいる」というので、妻は驚いたそうです。声も届かず、合図の仕様もないまま、それが半年間の別れになりました。その後、私が広島に行ったことも、原

爆を受けたことも、家族は何も知らず、生死もわからないまま、終戦後一カ月して、私が帰って初めて、色々なことがわかったのです。

広島に行つて、私は船舶砲兵团指令部指田中隊に入り、五月には新潟から船で外地に向けて出発しました。ところが、下関あたりで機雷に当たり、船が沈没、浜辺に打ち上げられ、九州の折尾駅から、また広島に舞い戻りました。広島女子商業の校舎の一部が宿舍で、次の出勤命令待ちの毎日、比治山で木を伐採するなど、勤労奉仕をしていました。

八月六日の朝は、朝礼で中隊長の話を聞いているとき、突然、爆弾が落ちてきたのです。泡を食って防空壕に逃げこみましたが、出てきたときは、皆が火傷や怪我を負っていて驚きました。私は背が高いので、左顔半分が焼けて黒くなってました。衛生兵ですから、自分で亜鉛華とゴマ油を塗って包帯をしておきました。この火傷の跡は一〇年位

消えませんでした。衛生中隊では、野戦病院を段原小学校に作り、町中にも二カ所に救護所をつくることになりました。専売局の前と、段原大畑の

市電の曲がり角の二カ所です。「元気な者はいけ」といわれても、元気な者など一人もないのです。が、それでも十人揃って行き、二つに別れて、救援の仕事をしました。焼け跡からどんどん運ばれて来る人に、油や赤チンを塗って治療し、市電の通りにゴザを敷いて並べていくのですが、痛いから転がる、隣の人にぶつかる、痛い痛みがつぎつぎに伝染して、はじの人はドブに落ちて死んだり、それは悲惨でした。こういうひどい状況が三日ぐらい続いて、それから、歩いて通ってくる人を毎日百人ぐらい治療していました。終戦も知らない位でした。兵隊が帰国を始めたので、わかったのですが、私は町に医者がないので、帰してもらえなかったんです。やっと、九月半ばに帰ることができました。よく「兵隊さんは何もやって

くれなかった」といわれるけど、私たちは一生懸命やっただけですよ。

治療中、私が一番ショックをうけたのは、赤ん坊です。はいつくばっておっぱいを欲しがります。お母さんは全身火傷で、おっぱいなんてあげられないんです。顔も火傷で、目が塞がってみえないんです。赤ん坊が火傷もなくきれいなのは、お母さんが覆いかぶさって、子供をかばったからでしょう。元気な子供は乳をほしがって泣く、でも、どうしようもなかったんです。多分、似の島に送られて、死んだとおもいます。ずうっと後になって、このことは絵にかいておこうとしたけど、どうしてもかききれませんでした。あんな悲惨なことはありません。

私も夫婦は、今年、金婚式をむかえます。子や孫たちが計画してくれて、曾孫もふくめて一族で旅行をします。平和であることのありがたさを感じています。

トモちゃん

石川 逸子（詩人）

トモちゃんは

日本が敗けて二二年もたってから生まれましたから
戦争のことは知りません

カーキ色のゲートルも もんぺも

「クウシュウケイホウハツレイーイー」も

大日本帝国万歳っも知りません

少女だったお母さんが

長崎に住んでいて

防空頭巾をかぶって坂道をかけおりにいったことも

知りません

なんにも知らないトモちゃんが

五つのとき 高熱でたおれて

「再生不良性貧血」だといわれました

小さいトモちゃんは 血を吐き

鼻血をはげしく噴きだし

どんどん血が足りなくなっていくのです

お母さんは

思いだすまいとしていた八月九日の閃光に

いままた ばあっと照らし出されるおもいでした

（私は三キロの地点にいた

怪我ひとつしなかった

でも 放射能は浴びたのです）

特別爆撃作戦16号

25歳のチャック・スウィニーが操縦する機内から
アシユワース中佐が投下したプルトニウム爆弾

「太っちよ（ファットマン）」

にんげんの魔の心がつくりだし にんげんの体にす
みついて

二万六千年ガンマー線を出しつづける

プルトニウムー 239

あれから二七年目の八月一六日

すきとおるように細くなって

ポーンと内臓が破裂してしまった トモちゃん

一番大きいお星さまになるの

トモちゃんは言っていた

お母さんは夜空を探します

つめたくはないの

そんなに遠くては毛布もかけてあげられないのに

闇のなかで

どんなにさびしいか

寝る前にしてあげたお伽話のこえもとどかないのに

どんな返事もなくて

ただチカチカと

トモちゃんの星は たてこんだ家々の上で光ってい

ます



『鳩になって』の渡辺和子さんの手記

「わが子をなくして」を読んで

広島のカンギ

たなべ まもる (広島)

広島平和記念公園をはさむ本川と東側の元安川の両岸には、川に下りる石段がいくつか残り、岸には幅広い石積みが連なっています。カンギ、雁木という字でも当てはめるのでしょうか。舟運盛んな往時の舟着き場でした。かつてその川沿いに米穀を始めとする物産の間屋さんが集まっていたのです。

戦時中、わたしが中学生だった頃も、似島や能美・江田島から来ているという舟を数多く見かけたものです。畑の肥料にするため、市内から出る生ごみを運びにきていたのです。それは、島々が

芋にかわるみかん栽培一辺倒になるころまで続いていたようですが……。

ところで、いささか私事にわたりますが、「でんしゃみち・1988」なる題でNHK・FMシアターに書いたことがあります。今年西ドイツ放送からも出るようになっていますが、制作者に十数年来迫られながら、ためらっていたものです。

いわば私ドラマで、あの日爆心地近いどこかへ、勤労奉仕に出たまま行方不明になった中学一年生の弟ふたりを、ついに探し当てられなかった悔いを、さまよい歩いた当時と現在の風景に託しながら描こうとしたことでした。

内容はともかく、その取材を通して実に四十数年ぶりに知り得たことがありました。

ひとつは、全員が犠牲になったとされている中で、一人だけ生き残った生徒をみつけたことです。今は市内で鉄工業を営んでおられる江田島出身のF氏です。当時、F君は寄宿舎から通学していま

した。その日も建物疎開の勤労奉仕に出てきました。腹痛を起こし、川べりに島の舟がいるのを知って、そのまま便乗して帰ったことから助かったのです。二日後戻って現地をのぞいたところ、熱くて近寄れなかったということでした。——ああ、わたしも何度か近づこうとし、その後も踏み迷った所だったのです！——

さらに、今はお年のさる先生にも詳しく聞くことができました。ずっと下流の学校にあって無事だった先生も三日後になって搜索ができるようになりましたが、生徒たちの遭難地点を特定することができません。やっと判明したのは、引率の先生をそれが自慢の半長靴から発見できたことからでした。

「兼本先生は川をのぞきこむようにはぶさって（腹這って）おられました」

おそらく、近くの石段を下りて川へ逃げていく教え子たちを見守っておられたのでしょうか。し

かし、その場や川岸で息絶えていた生徒たちのほとんどは誰と識別がつかず、わずかに何人かの生徒手帳などを収集したにすぎなかったようです。

丸太のように積み重ねて火葬を急ぐ宇品の船舶兵たちが、現場の保存や遺体の引き取りを許さなかったのです。——いったい、ふたりの弟は川へ逃げたのか、そこで焼かれてしまったのか……。——

さて、そうしたことを始めとして遺族の間に愛児たちの終焉の場所が長らく明らかにされていなかったのも事実です。しかし、母は毎年夏のその日になると、慰霊碑前での式典には背を向けて、庭で咲かせたダリヤだのをもって川べりにただずむのが常でした。その付近ではそこしかない石段を下りたガンギです。久し振りに広島近郊の母を訪ねて取材の結果を告げましても、こういったものです。

「わしにゃとうからわかつとったけえ」

その川のほとりに弟たちの学校の慰霊碑がやっ

と建立されたのは88年の春。長い間公設青果市場があって立入禁止だったり、河川法の制約があるなどの事情もあったようです。その除幕の日、折からの豪雨の中を集まった父兄は、わたしの父をはじめとするわずか七人だったとかです。

その石碑を訪ねていったのはそれから間もなく、やはり雨の中でした。「おお、ここだったのか。ここだったのか」と石の上に手をおいたまま、今こそ尋ね当てた思いで身動きできません。遠く横浜にあって、ただ夢の中で同じ道を繰り返しさまよい探していただけのわたしを罵り責めるばかりでした。

ついですが、母は七〇に手が届くころになって日本画の手習いを始めました。最初は葉っぱをおいて輪郭をなぞるようなことでしたが、十数年も経つとなんとか見られるようになっていました。その母も次の年、八九年春亡くなりましたが、その通夜の席に描きためた額や屏風をいっぱい

並べて念願の個展を開いてやりました。最後の作品は平和公園に咲く蓮の花を写した二双の軸でした。かねて口やかましく言いつづけていた石碑のことといい、子供たちへの手土産が間に合ったようです。

今、わたしたちの脳裏に穏やかな風景が浮かびます。あの慰霊碑の下、のどかに川面を眺めながらガンギにただずむ母と中学生のままでの弟たちの姿です。それは遙かな景色ながら、なぜかほっとしているわたしです。



苦しみは私たちだけで沢山

堤 晶子

（長崎、87・7・19
追悼式で発表）

人類史上はじめて、昭和二〇年八月六日広島、八月九日長崎に、原子爆弾が投下されてもう四二周年を迎え、あらたに原爆の怖ろしさが身にします。

私も原爆を受けたせい、身体が弱くて病院通いばかりしているこの頃です。夫も被爆者で、子どもは被爆二世です。長崎に原爆が投下された時は、私は五歳でしたので何もわかりませんので、父より聞いた話をいたします。

原爆が落ちたとき、父は造船所で働いていたそうです。そのとき父は爆風で吹き飛ばされ、目の

前が真暗になり、わからなくなったそうです。やっとの思いで外へ出て、浦上の方面を見ると一面火の海で、あちこちらの家々や山々もくすぶり燃えているので、いつもの道は通れず、家族の安否を気ずかいながら、一日かかるところを二日もかかり帰ってきたそうです。その途中、あちらこちらで爆風でベッチャンコになって倒れている家、燃えている家の中から助けテクレ助けテクレと泣き叫ぶ声、父はそのたびに助けられる人は助けたそうです。

また、洋服に火が燃え移ったまま逃げまわる人たちが、いながらにして地獄絵をみているようだったそうです。全身火傷の人たちなど歩くこともできず、人が通ると水をほしがり、父は、助からないなと思った人には水を飲ませたとのこと、この人たちはお礼を言いながらみな死んでいったそうです。

また、真黒焦げになって男か女かわからない状

態で死んでいる人たち、腸が風船のようになって飛び出して死んでいる人、芝居のように親が子を探し子が親を探しているし、洋服がぼろぼろになっ
ているなあとと思ったら、皮膚が焼けただれ垂れ下がっている、ちょっとでもさわるとズルツと皮膚の皮がむけるとい
う、聞いただけでぞっとして身の毛のよだつ気持ちでした。

当時、家野町にいた母と兄は一時行方がわからず、父はあちらこちらの臨時収容所を尋ね歩きま
した。

その折、水を求めて川に入った人たちは力つき、死人の山と化しており、収容された人たちも爆風でガラスの破片が体中に刺さっていて、熱線で全身焼けただれ、虫の息で横たわって、大きな悲鳴、うめき声、絶叫してのたうちまわって苦しんでおり、怪我や火傷した傷が化のうし、ウジがわいても取りのぞく気力もなく、ただ痛いヨ痛いヨとい
いながら、多くの人が亡くなっていくのを見たそ

うです。

母も兄も、近所の人の話で、全身火傷して入院していることがわかり、その母も二ヶ月後に亡くなり、兄も今もってなおケロイド状の傷あとが残っています。

戦争ほど残酷なものはない、戦争ほど悲惨なものはない、二度と戦争をおこしてはならない、被爆後四二年たって今も病床で苦しんでいる人、原爆障害で亡くなっていく人が数多くいます。私たち親子もいつ発病するかわからないのです。

このような苦しみは私たちで沢山です。また、現在、世界の原爆の数は五万をこえているのと、その一%でも使われると地球はなくなると聞いております。

そのような核兵器の怖ろしさを人々に訴え、一日も早く核兵器をなくし、残酷で悲惨な戦争をなくし、世界各国の人々が手をとりあって平和的
社会を築くためにも、一人ひとりが世界平和のため

に邁進してまいりましょう。

若くして逝った夫のこと……

友 安 静 恵

（広島、親江会だより 九五号掲載。当時、消防手
・友安勉（三三歳）の妻）

私の主人は、昭和二〇年三月一五日、消防署に入り、一か月間の練習期間を修了して、西消防署勤務になりました。

八月五日は早朝より出勤し、その日は西警察署分遣隊に勤務して、八月六日、交代を済ませ、帰宅中に、主人は土橋付近で、被爆しました。

当時、私たちは、佐伯郡八幡村の平地というところに住み、長女・京子（当時九歳）を頭に、次女・紀子（七歳）、長男・晃（五歳）、次男・武

司（二歳）の四人の子供がおりました。

主人は生前、「電車で帰宅中に、土橋付近で原爆を受け、そのまま己斐の出張所まで行き、己斐出張所の人たちと一緒にたって消火活動をした。

その後は、西本署に行き、死体の整理や後片づけをし、遺骨をそれぞれ袋に入れて遺族の人に渡した……」と、よく話していました。

原爆の放射能を受けていたためか、投下後四〇日余り経ってから、体の変調をきたし、発熱、下痢、また出血しながら勤務していましたが、やむなく、昭和二〇年九月三〇日、退職いたしました。

退職後は、しばらく家のほうで、時計商を営んでおりましたが、年々、体が弱まり、このままでは生活できないので、私の実家、岩国に帰ることにしました。

そのうち、目が見えなくなったり、風呂にも二〇日間に一度くらいしか入られないように体が衰え、死亡前は、八〇歳くらいの老化現象を起こし

ており、側でみている私たちには、本当にいいお
しい程の様子でございました。

その後、病院に入院いたしました。二週間目
くらいから、さらに悪化し、脳血栓となり、四日
間仮死状態でありましたが、遂に昭和四七年一〇
月三十一日、五九歳の若さで、五人の子供たちに見
守られて、静かに永眠いたしました。

当時を思い出しますと、主人はまだ若く、生
活に自信をもっていました。色々な病気にかか
り、私が原爆病院への入院をすすめましたが、子
供が大きくなるまで頑張るんだ、と言って入院を
拒みました。

多分、主人としても、家族の生活がかかってお
り、入院という安易な気持ちになれなかったもの
と思いますが、原爆により他にもこういう悲しい
思い出の人が、沢山おられるのではないかと思ひ
ます。

(筆者は、一九八九年二月八日、永眠されました)



▲原爆犠牲者追悼碑絵はがき……1987年9月、ニューヨークで開かれた世界核被害者
世界大会に、江戸川区労協の楠田議長が出席する際に、1,000部制作、世界の代
表に手渡した。5枚1セットが滝野公園地図付きの封筒に入っている。

いまも口に出して話せない

戸山 真寿美（長崎）

私は、長崎市西立神町で被爆しました。爆心地から三・五キロぐらいの所です。山の多い長崎で、三菱造船所の上にある高台でした。

八月九日、その日はとても天気がよくて、六歳だった私は姉と一緒に外で遊んでいました。お昼になったので家に帰って来て、台所でそこらにあるものをつまんで食べたように覚えています。

そのときでした。ピカッと周囲が燃えたように光りました。そこまでしか私は覚えていません。

気がついたら血の海の中に倒れていました。姉もぼんやり立っていました。爆風に吹きとばされたのです。家の中を何かが通り抜けたように、ガラスはメチャメチャに壊れ、そのガラスが私の身体に刺さっていました。なかでも左目の下には、今でもはっきり傷跡が残っています。血の海はそこからの出血によってでした。ほんの少し上だったら、失明していたでしょう。父は私をおんぶして、防空壕の中にあつた治療所に連れて行ってくれました。私の家族は両親と一〇人きょうだいでしたが、怪我をしたのはわたしだけでした。一緒にいた姉も無事でした。長崎は山があるので、光や爆風、被害も距離だけでは測れないようです。私の家はちょうど爆風が通り過ぎた通路にあつたのではないのでしょうか。家具は倒れ、ふすまやしょうじ、ガラス戸は吹き飛んでいました。ピカッと光ったとき、私はすぐ台所の窓を閉めたような記憶もあります。そのガラスが私を襲ったのでしょ

う。

その後、私は結婚し、娘が三人生まれましたし、健康にも恵まれて生活してきました。被爆したことをあまり不安に思わないで生きて来ましたが、同じ長崎で被爆した主人は、ガンで五七年に亡くなりました。四二年に東京・江戸川区に引っ越して来て、溶接の仕事を元気にやっておりましたが、一五年前、日大病院で胃ガンと診断され、手術を受けました。その時は完治しましたが、その後、再発により亡くなりました。

被爆したことを忘れようとしても、被爆したことは消えません。私は一〇人のきょうだいたちと、被爆したことについて話し合ったことはありません。みな心のうちでは考えているのですが、口に出して話すのが怖いという気持ちもあります。

私は三人の娘とも、被爆のことについては話しません。いまのところ、みんな健康です。私も働

かなければなりません。

四五年たっても、長崎で経験したことはついてまわります。親江会は私にとって、心の休まる場所です。同じ被爆体験をしている人たちですから、私の気持ちがよく分かってもええですし、旅行会や行事には出来るだけ出席しています。暗い気持ちにならないように、明るく前向きに生きていこうと思っています。



▲追悼碑を訪れた被爆2世たち。

いま江戸川区に在住する被爆者は約300人。被爆2世、3世も多い。

もし、お姉さんに

ついて行っていたら……

中尾 嬢 二

(長崎、85・8・4
追悼式で発表)

長崎での被爆のお話をする前に、当時の私の生活について申し上げます。

鹿児島島の造船所で働いていた父が、沖縄が米国に占領されると、これは危ないといって長崎に帰って来て、私たち六人家族は市内から母の実家の田舎に疎開しました。三国町川内です。母の実家にはほかに親戚のものが来ているので、近くの竹やぶの中に私たちは家をつくりました。家といっても資材なんかある時代ではなく、材料はすべて竹でした。兄も一〇歳の私も父を手伝いました。竹を切り倒して、割って、わらの綱で編んで、屋

根も壁も作りました。物のない時代でしたが、いろいろ工夫して生活しました。

昭和二〇年八月八日の日、私は兄と空襲に備えて防空壕を掘っていたとき、大きな石を取りのけようとして左手の薬指を挟まれ、肉をそぎ取られ、骨が見える程の怪我をしてしまいました。父はすぐ傷口にタバコをふりかけ、市内の叔父の家のそばにある病院に連れて行ってくれました。叔父の家は浦上天主堂のすぐそばにありました。治療といってもリバノールを塗ってくれるくらいでした。

翌九日、今度は私が一人で病院に行きました。治療といってもガーゼの取り替えくらいのことですが、病院に行くには、山をひとつ越さなければならぬので、私は朝早く家を出ました。治療を受け、薬をもらって無事に家に帰り着きました。

その日、家を出るとき、母は私に、叔父さんのところに寄ってもいいけど、昼ご飯を食べていけと言われても、食べないで帰って来なさい、と言

いました。食糧が不足しているときですから、迷惑をかけてはいけなと考えたのでしょうか。食べないで帰るのなら寄ってもつまらない、と思います。それに指の傷が痛くてそれどころではないこともありました。治療が済むと真っすぐわが家に急ぐ途中で、叔父さんの家の、私をかわいがってくれるお姉さんに会いました。お姉さんはアメを買ってあげるから一緒に街に遊びに行こう、と私を誘いました。普通なら喜んで付いて行ったでしょう。そのときは指の傷が痛いので付いて行く気になりませんでした。

我が家に着いて、ただいま、と言ったとき、ピカッと光ったな、と感じました。そしてドンというにぶい音が聞こえました。私は少し吹き飛ばされましたが、どこにも怪我はしませんでした。

市内が大変だと聞き、叔父家族を案じ、両親と兄は浦上にでかけて行きましたが、熱くてとても近寄れないと言って帰って来ました。一日、今

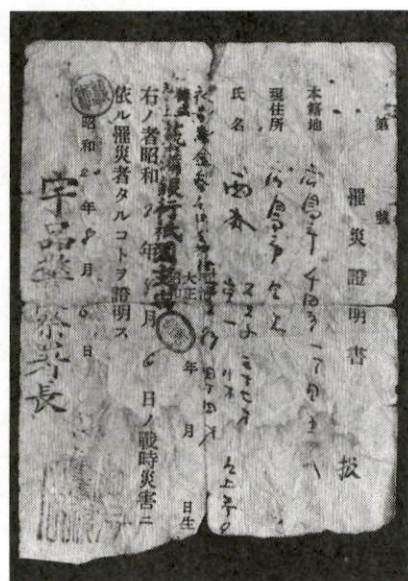
度は、母と兄と私の三人で行きました。浦上天主堂のドームがすっぽり落ちているし、親戚の家の場所も見分けられません。叔父夫婦と子供二人は、全滅でした。

私が、その日、叔父の家でゆっくりしていたら、私はいま生きていません。アメを買ってあげるからと言ったお姉さんに付いて行っていたら、お姉さんと同じように街のどこかで死んで、遺体も分からなくなっていました。

仕事の関係で、その後、私は江戸川区に住むようになりましたが、被爆のことは忘れようとしてきました。私の弟が被爆手帳をもらった、と聞いたとき、私はだらしななことをするな、と怒ったんです。弱気を起こすな、と。私の被爆手帳は母が長崎でとって送ってくれたものなんです。そんな気持ちの私のところに堤さんが、訪ねてくれました。おなじ長崎の被爆者だと知って親しく付き合うようになりました。

現在、私は、自営業で身体を休める暇もないくらい忙しく追いまわられている毎日ですが、親江会とか被爆者のことになると、元氣が出てくるのは、あの日に死んだ人々、叔父さん、やさしかったお姉さんのことが浮かんで来るからです。あの日に、私も死んでしまってもおかしくはなかったのです。

あんな悲惨なことは二度と繰り返してはなりません。



昭和20年8月6日の罹災証明書

一枚の罹災証明書

西本 宗一

(広島、87・2・23
江戸川区反核集会で発表)

清新町に住んでおります、西本でございます。

ちょうど一か月まえ、私は、広島で、藤田徳夫というかたとお会いしました。このかたは、ご記憶のかたもあると思います(広島に原爆が落とされた日に撮影された写真は五枚しか残っていませんが、そのなかの一枚「罹災証明書を書く藤田徳夫巡查」と説明が付いた写真のかたです)。罹災者に囲まれ、頭に包帯を巻き、ペンを持っておられる方です。

実は、私の家に一枚の「罹災証明書」がありました。昭和二〇年八月六日付のもので、宇品警察

署が発行したものです。最初、それを見つけたとき、あの混乱のなかで、よくも発行出来たものだからいにしか私は考えませんでした。しかし、藤

田徳夫巡査の写真とその説明を見てから、「罹災証明書」は藤田さんが書かれたのではないかと思いました。NHKの出版した『きみはヒロシマを見たか』のなかで、「八月六日午後四時三〇分から書きはじめた。三〇分で持っていた証明書を書きつくした。当時、警官は罹災証明書用紙を三〇枚持っていた」と語っておられます。私の手許にあるものは三〇枚のうち一枚ではないか。広島原爆資料館に尋ねましたら、八月六日付の「罹災証明書」は見たことはいないということでした。

きょう、ここにその証明書の写真を持ってきました。そのものは、オリジナルは広島原爆資料館にあります。（ここで証明書を読む）

どんないきさつでこれを書いてもらったのか、私は父からにも聞いていませんでした。是非、

一度、藤田さんにお会いして、当時の状況を伺いたいと思っていました。

お会いした藤田さんは、偶然にも、当時、昭和一九〇二年ごろ、私の住んでいた千田町一丁目を受け持つ巡査でした。パトロールの担当者でした。私の家も覚えておられました。しかも、被爆後もずっと千田町二丁目、隣の町内に住んでおられます。記憶をたどって地図を書きながら、ここが床屋、ここが写真屋、旅館、学校、こんな道があつて……、当時の街を復元しながら、四〇数年前の世界にもどっていました。そして、そこに住んでいた人たちのその後の消息を聞きました。一家全滅、学童疎開で子供一人だけ残った家、しばらくはバラック小屋に住んでいたものの次々に亡くなっていった家族、自殺した人……、元気に老人会の会長をしておられるかたもありましたが、多くは悲しい話で、被爆の深い爪跡を見せつけられました。

昭和二〇年八月六日の朝、私の家では、両親と私たち子供三人が一緒に食事をして、父が出勤したあと、母と姉（二三歳）、妹（六歳）、私の四人が同じ部屋に居たときでした。仏間のうす暗い部屋でしたが、原爆が落とされたとき、畳の目一本いっぽんが数えられるほど明るい光が、突然に差し込み、すごい圧力を感じたことしか覚えていません。次に気がついたとき、私は家の下敷きになっていました。口のなかに壁土が一杯入っていて、息苦しくて意識が戻ったのです。ひどい土ぼりの中に明かりが洩れてくるところがあって、それを頼りに外に出ました。母も全身血に染まって傷だらけでどこからか出てきましたが、はじめは誰だかわかりませんでした。私の家は爆心地から一四〇〇メートルの距離でしたが、周りの家はすべて屋根で蓋をしたように倒れていました。広島文理科大学付属中学の校舎が焼け落ちて、すぐ火が迫ってきました。私は逃げようと言いましたが、

母は動こうとしません。私はふらふらする母の手を引っ張って、夢中で日赤病院へ逃げました。途中、何度も振り返って、置き去りにする姉と妹に手を合わせていた母の姿をいまもはっきり思い出します。下敷きになっていた姉と妹を助け出せなかったのです。日赤病院で会えた父は戸外で被爆し、顔や手は火傷をして、赤くただれていました。翌日、田舎の親戚まで一日かかって歩いてたどり着きました。

一昨年、被団協が実施した被爆者意識調査を記入していて気づいたことがあります。私の母の兄弟は五人いまして、みんな広島市内で被爆した家族ですが、戦後四〇数年の間に亡くなった一人のうち、原爆死が四人、あとは全員ガンによって亡くなっています。ケロイドの跡をとどめている従兄弟、甲状腺ガンの手術を受けた者もあります。私の父も骨髄ガンで亡くなりました。母は七八歳

になりますが、貧血に悩まされています。私もときおり襲われる全身の倦怠感はどのようにも説明が出来ません。

リトル・ボーイと名付けられた一発の原爆によって、どれだけ犠牲が出たのでしょうか。投下されたときだけではありません。その後、四〇数年ずっといまも続いています。放射能障害については予想もつきません。

日本の歴史を学んだとき、広島・長崎に原爆が投下されたのは、日本にとっても、私たちにとっても、身に覚えの無いことではないことを知りました。もし、日本が原爆を持っていたら、当然使ったことでしょう。

戦争が原因です。私の父は召集されて軍属として、広島にあった第二総軍指令部で働いていましたし、母は国防婦人会で活躍していました。国を挙げての戦争に協力していたのです。国家に対して反対することは大変なことであったことはよく

分かります。しかし、反対した人もいました。子供のとき、学生るとき、私は大人は何をしていたのか、だらしなかったと思いました。でも、今は逆に、私が、おまえは何をしているのかと、次の世代から問われる立場に立たされていると思います。平和だ、平和だと言っているうちに、世の動きが変わってきています。自由が無くなるうとしています。

いま、日本の動きを見てみると、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」と刻まれた言葉がむなしく聞こえます。

二度と私たちのような犠牲者をつくってはなりません。ほかの人たちに私たち被爆者の体験をさせてはならないと思います。再び戦争の道を歩まないように、核兵器が使われないように努力しなければなりません。先ほど見たアニメ「一〇〇ばんめのサル」のように、たとえ小さな力であったとしても、一匹のサルの役目をしたと思います。

広島・長崎の被爆者のなかには、アメリカ人、朝鮮人、中国人、オランダ人なども含まれています。また、原水爆実験による被爆者がアメリカやミクロネシアやマーシャル群島にたくさんまわっています。私たちはこうした人たちと手を取り合って、核廃絶を訴えたいと思います。

そのための具体的な第一歩は、私たちの生活のなかから始まると思います。江戸川非核平和都市宣言署名を一人ひとりに書いてもらうことから、輪が大きく広がっていくことを期待しています。



平和よ永遠に

松谷 幸江

（広島、89・7・23
追悼式で発表）

昭和二〇年八月六日、私は広島県立女子専門学校本科三年生、一九歳でした。学徒報国隊として、暁六一四〇部隊縫装工場で働いていました。

原爆投下された八時一五分は、竹やりおよび銃剣術訓練も終わり、作業開始前の休み時間でした。水飲場で水を飲み始めたとき、突然、熱風が窓から吹き込んで来ました。空を見上げたところ、真赤なカタマリがキラキラ輝きながら落ちていました。急に加速度が増したと思った途端、「ドン」という音と共に白い雲がもくもくと湧き上りました。俗にいう「キノコ雲」です。友人はと、周り

を見ましたら、みな足元に伏せていて、その上にガラスの破片が飛び散り、兵隊さんたちも血だらけの状態でした。私は部屋の隅に飛ばされていました。みんなが起き上がったので、大急ぎで私も作業場へ帰りました。建物は全壊し、下敷きになって居た友だちの救出作業をしました。そのうち、市内からトラックに被爆者が満載され、運ばれて来ましたので、無我夢中で、命令されるまま救急作業に従事しました。（名前の記録、医務室への搬送、傷口を縫合するさいの押え役など）

急に、女専生徒集合、という伝達があり、「軍の要請に依り、兵舎に収容した被爆者看護のため一〇人申し出て欲しい」と先生に言われましたので、私は喜んで希望しました。その時は、自分が無傷であることに對する申し訳けないような気持ちと、家族のことより目前のこの人たちを助けてあげなければという使命感にも似た思いでいっぱいでした。

その晩、兵舎屋上の監視塔で、広島市内の火災状況を見ましたが、周りが山と海なので、丁度、すりばちの中が真赤なるつぼのようでした。

翌七日、一日だけ自分の家を見に帰る許可が出たので、朝早く数人ずつ組み、自分たちの家へ行きました。勿論、私の家は焼けていました。裏土手にある電柱の陰に、男性の黒焦げ死体がありました。（後に、私の祖父であったことを知りました）母と祖母が火の中を逃げたこと、弟が千田小学校で大怪我をして共済病院に収容されてるのと聞きました。一緒に行った友人のお母さまが大河小学校に収容されてることも分かりましたので、大河小学校に行き、そこに友人を残し、私は弟を迎えに共済病院へ行きましたが、姉が既に連れ帰った後で、結局、家族には会えず、夕方、兵舎に戻り、直ちに、看護作業につきました。主な仕事は、傷の手当、死亡の看取りと死体の処置、食事の世話、排せつの世話、空襲警報のさいの防空壕への

退避手助けなどでした。私の髪も、服を通して体も、うみと油薬でベトベトになりました。三日間は、睡眠をとったことも食事をした記憶もありません。

四日目、九日に、被爆者も連日死亡して数もずっと減ったし、女専の生徒も疲れてるようだからと、三交替制になり、一六時間働いて、八時間休憩と決まりました。私たちの休憩場所として、将校室をあけて下さいました。家が焼けていない人たちは、休憩時間を利用して、やっと家を見に帰ることが出来たようです。私の班は、三人とも帰る家がないので、そこを利用していただきました。身体が伸ばせ、友だちと話せる幸せをつくづく感じました。休憩時間が夜になったとき、暗がりにある水道の蛇口を見付け、三人交替で見張りをしながら身体を流しました。その気持ちの良かったことは忘れられません。

そのうちに、今度は私たちの下痢が始まりました。

た。私は血便が激しくて止まらなくなったので、一四日、軍から「これ以上は勤務不可能」と決断が下され、帰宅命令が出ました。母と弟が廿日市に居ることが判明したので、陸上は無理、船で海上輸送と決まり、兵隊さん二人が抱きかかえるようにして、廿日市港から家まで運んで下さいました。あの時は話す力も無かったので、兵隊さんの名前も聞くことが出来ませんでした。その優しい温かい心遣いを今も忘れることは出来ません。

帰宅してからも血便回数は増え、水もおかゆものどを通らない日が続いたので、骨に皮が張り付いて「ミイラ」のようになりました。数日後、軍医さんが一日だけ休みがとれたからと診察に来て下さいました。「注射だけしておきますが、今晩何かあったら知らせるように」と言われました。離れた部屋で、家族が私の葬式のことを小声で話しているのが聞こえたので、とうとう私の番が来たなと思いました。どうせ死ぬのなら、この

病気の正体は何かを知りたいと考え、トイレに這って行き、思い切り踏ん張って見ました。血のかたまりのような物が出たように思いますが、私は「ついに腸が出た」と思った途端、失神したようです。気がついたとき、私はふとんに寝かされ、みんなの顔が重なり合っているのぞき込んでいました。それからだんだん食欲も出始め、回復に向かいました。

その後、教職に就き、何とか人並に結婚もし、三人の子供も与えられ、入院、通院を繰り返しながらも、まあまあ私なりに平和な生活をして参りました。

三〇年後、昭和五〇年の夏、また下痢が始まりました。今度は、薬も点滴も出来ましたから、ミイラにはなりませんでしたが、筋肉はすっかり衰弱しました。その年の八月一日、広島県立女子大学で、三〇年後の卒業式をして下さいましたので、私はこれが最後と思い、広島に参りました。

腹痛がひどくなり、原爆病院へ行きましたところ、「被爆者なのに、どうして無茶なことをするのか、東京に帰ったらすぐ病院へ行くように」と叱られ、注射と薬をいただきました。帰京後、肝臓病で入院しましたが、結局三か月間、下痢が続き、前と同じようにかたまりのような物が出て、ようやく止まりました。その時また、あらためて原爆の怖さを知りました。現在某大学附属病院に通院しています。「あなたは、やせだすと、癌の兆候だから、救急車で来るように」と言われています。今はまだ肥って居りますから、大丈夫です。検査だけは忠実にうけています。

今回お話を引き受けたのは、焼け跡の水道の蛇口で一緒に身体を流した友だちの一人が数年前に亡くなり、兵舎の看護に残った中の一人は、足裏の腫瘍が治らず、点滴に通っていることを知ったからです。

私にも何が起こるか分かりません。原爆の恐ろ

しさを知っている私が、このまま沈黙を続けていいのかと考えるようになりました。私は被爆者であることを隠していた訳ではありませんが、あの時の悲惨さを思い出すと、涙が止まらなくなるのです。でもまだ記憶のはっきりしているうちに、話さなければという被爆者としての責任を感じています。

私の家は焼け、祖父と妹（女学校二年、雑魚場町で被爆）は当日、死亡し、弟（小学校二年）も学校で大怪我をしました。父は一年後、原爆がもとで死亡し、母も癌で亡くなりました。

先日、東京大空襲の平和行進に参加して、下町の惨状も知りました。戦争だったから仕方なかったという言葉をよく聞きますが、この一言で簡単に片付け、忘れていいのでしょうか。今の日本は確かに平和ですし、平和であることは本当に幸せです。だからこそ、私はお願いしたいのです。政治家の皆さま、核兵器、核の持ち込みは、どんな

ことがあっても阻止して下さい。また原発の問題も、原発が増設されればされるたびに、危険が増加するということを考えて欲しいのです。被爆の犠牲者を出してからでは、もう取り返しがつかないのです。

きょうお集まりの若いみなさん。現代は私たちの時と違って、勉強も研究も充分できます。皆さまは二一世紀を担う大切なかたがたです。この中から政治家、科学者、その他色々な立派な働きをするかたが出られると信じています。人の生命の尊さを忘れた政治、社会には、絶対、平和はないのです。私は被爆したのですから、どんなことが起きても仕方ないと諦めています。今年色々なことが片付きましたら、被爆者のために、被爆二世三世のために、献体を申し出るつもりで居ります。医学に進まれるかたは、どんなささいなことも見逃がさないで、研究し治療に役立てて下さることを願っています。

どうか核の犠牲者は、私たちで最後にして下さい。お願いします。

碑の前に

持田 郁子（広島）

この間、ふと気がつきました。あの日、原爆に灼き殺された人よりも、私は、ほぼ四万九千回も余計に御飯を食べたことを。

そして、一回食べる毎に私はのんきになって、死んだ人から遠ざかってはいないだろうかと、考えました。

私の右腕の火傷の痕が薄らぎ、消えていった歲月と共に、私の中の原爆も飼い馴らされてしまっ

てはいないかしら、と考えました。

黙禱はじめ、といわれても、その一分の間に、心を広島に向けることは難しく、私は、唯ぼんやりしていることのあることを、認めないわけにはいきません。

そんな私の鼻の奥に、さっと原爆の臭いのするのは、夾竹桃の花びらが、できたてのケロイドに見える時。また、春一番の黄塵に、崩れた校舎から這い出した直後の校庭を思い出したりする時です。

それにもまして、江戸川の慰霊碑の前に佇つと、私は八月六日に還ります。この碑に納められた犠牲者名簿の中に、同じ教室で被爆した幼なじみの名前が入っています。

「杉浦礼子は、ここにいます」

杉浦礼子は、ここにいます」

押し潰された教室の底の方から聞こえてくる彼女の声が、耳から消えません。



▲遺影を抱いて追悼式に出席する遺族。

右から相川弘（前親江会会長）夫人と
山内正夫夫人。

たくさんの人を見捨てて生きてきたことを、辛くても思い出すために、大切な慰霊祭に、今年も参加させていただきます。あの日が遠くなればなるほど、この碑の前に佇つことを、自分に約束したいと思います。

二度と戦争のない世界に

吉村 美智子

（長崎、86・7・20）
追悼式で発表

あの八月九日。長崎地方の空には雲一つなく、夏の太陽が照りつけ、いつもながら聞きなれたB29の爆音を耳にしながら、私は近所のお姉さん（活水中学）と十二竹を作るのに夢中でした。ピカッと光って周囲が暗くなり、突風が吹いて来ました。気がついた時は、私は庭のヒイラギの木の下に耳をおさえてふせをしていました。

私の家は爆心地から約七・五キロはなれた所で（長与町）、雑貨商をやっておりました。二階の天井板はふくれあがり、間仕切りの敷居の欄間は落ちていました。前の部屋に昼寝をしていた山口

さん親子は障子のガラスの下敷になり、顔や手にガラスがささっていました。

父は爆心地から近い大橋の兵器製作所に勤めておりましたが、当日は運良く長与の堂崎の発射場にいたため、命は助かりました。良く晴れた長崎地方の空はまたたくまに真赤に染まり、子供心にすごくこわいなあーと思いました(当時私は九歳)。

次の日から父は大橋付近の死体の片づけにかり出され、くる日もくる日も赤黒くなって帰ってきました。父の話によると、大橋の道は死体でさえぎられ、死体の上に鉄板を置いて、その上を人々は歩いていったそうです。橋の下の川の中には、水を求めていった人々が息絶えて折り重なっていたそうで、黒こげで手首のない人、足のない人、人とは思えない黒こげの人形を見るようだったと言っていました。当日は浦上地方は火の海で、「山を越えて長与小学校へ行け!!」との命令で、被災者たちはお互いに助け合いながら長与小学校へと

歩き、道ノ尾駅付近の人たちは、幽霊の行進だとあつけに取られていたそうです。私に通っていた長与小学校は病院になり、大勢の人々が自力で集まって来ましたが、男か女か、前か後か、ただれた皮膚を引きづりながら目はただうつろにどこを見るときもなくにぶく、この世の人とは思えぬ姿でたどりついて、ぐったり息絶えて死んだ人も多くいたそうです。翌日にはウジがわき、それをご飯茶わんですくってやると、きもちよさそうだったとか。ガーゼ、脱脂綿も不足がちで、とにかく大変だったそうです。死んだ人々は学校の裏の竹山でまとめて、油をかけ焼かれたそうです。

被爆以来四四年たった今日、今もって放射能障害の苦痛から脱することの出来ない多くの人々がいるというのに、核兵器の恐怖が覆いかぶさっている事実をどうすればいいのでしょうか。それには一人でも多くの人々に被爆体験を語ることが、私たちが被爆者の使命であろうと考えています。私

は二度とこのようなことが起こらぬように核兵器禁止を叫びます。肉体的悩みを一生持ち続けて、援護法の制定なしに戦後は終わっていいのでしょうか。核戦争が起これば、現在の生活も、平和も自由も、子孫もあったものではありません。

八月九日。どこにいても、生きている限り忘れられないこの日、平和な時代に生きることの幸せを思い、二度と戦争のない世界になることを願って、亡くなられた方々のご冥福をお祈りいたします。



ペンライト手に反核デモ

江戸川で子供やお年寄り150人



ペンライトを手に行進するキャンドルデモ

原爆犠牲者慰霊平和祈念式
典が長崎市で開かれた九日
夕、江戸川区中葛西の区立竜
野公園で「子どもたちに平和
を」を反核キャンドルデモ（原
水研江川区民会諸主催）が

行われた。参加したお年寄り
から子供まで約百五十人は同
公園での集会后、地下鉄東西
線西葛西駅前広場までの約一
・五キロをペンライトを手に歩

間公園内に原爆犠牲者追悼
碑ができたのを機に、八年前
から毎年行っている。参
加者たちはデモに先立ち、追
悼碑に一分間の黙とうをささ
げた。

毎日新聞 (89・8・10)

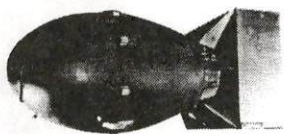
広島・長崎の被爆

1945年8月6日午前8時15分、テニアン島から飛来したアメリカの日29爆撃機エノラ・ゲイ号は、広島市上空約580メートルでウランウム原爆（ニックネーム・「リトルボーイ」）を炸裂させた。TNT火薬に換算して約13,000トン分に相当。



第二次世界大戦のなかでもっともひどい被害をひきおこした原子爆弾は、いまもなおその影響をのこしている点で、現代の戦争の見本のようなものだといえよう。原子爆弾は、広島市では上空約六〇〇メートル、長崎市では上空五〇〇メートルで爆発した。爆発とともに小さな火球ができ、その火球は一秒後には約二八〇メートルの直径をもつ大火球となった。その温度は爆発の瞬間には摂氏数百万度、一万分の一秒後で約三〇万度、一秒後に火球の表面温度は約五〇〇〇度であったといわれている。一言でいえば、人工の小太陽ができたのである。だから、やけどもおきる。広島では三・五キロ、長崎では四キロ爆心から離れていても、やけどした。二キロ以内では可燃物はいつせいにえ上がり、大火災となった。

爆発とともに、数十万気圧という考えられないほどの高圧状態がおこり、まわりの空気は膨張して爆風となった。爆心地から五〇〇メートルでは秒速二八〇メートル、八〇〇メートルで二〇〇メートル、二・六キロ離れていても三六メートルの爆風がふいた。おまけに地面にたたきつけられた爆風と原爆から直接吹いてきた爆風がいっしょになると、爆風の力はいくらと大きくなる。これを「マッハ効果」という。地上五〇〇―六〇〇メートルで原爆を爆発させたのは、このマッハ効果をねらったためだといわれている。このため爆心から七キロ離れていてもガラスがふきとんだ家もあった。



史上2発目のプルトニウム
原爆（ニッフネーム「ファットマン」）が1945年8月9
日午前11時2分、長崎市内
北部、松山町の上空約500
メートルで爆発。TNT火
薬約22,000トンに相当。原
爆の威力そのものは広島に
投下されたものより大きい。

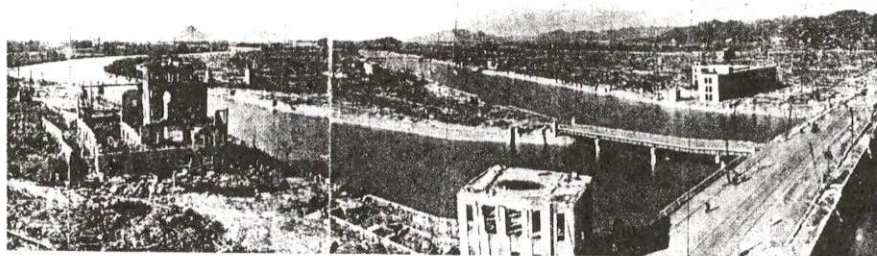
原子爆弾のもう一つの特徴は、放射能である。

原子爆弾はよく知られているように、原子核を分裂させ、そのとき出てくるエネルギーを利用しようとするものである。物質は原子からできている。原子のまん中には原子の質量のほとんどをとりこんだ原子核があり、そのまわりを電子がまわっている。原子核は陽子と中性子が固く結合してできているが、外から粒子をうまくうちこむと分裂する。分裂するとき粒子がとび出し、それが放射線をつくる。それらの粒子が中性子であれば中性子線、電子であればベータ線を出す。広島原子爆弾ではウラン²³⁵の核分裂が利用され、長崎の原子爆弾ではプルトニウムの核分裂が利用された。中性子線、ベータ線のほかに、ヘリウム原子核のながれのアルファ線、光と同じような性質をもったガンマ線という放射線も放出された。

原爆によって被爆者があびた放射能には、①爆発した瞬間に生じた放射能、②放射能をうけた物質が自分自身も放射能を出す物質となり、そこから放射された誘導放射能、③爆発とともに放射能を多量に出す核分裂生成物ができ、それが空中高く舞い上がり、「死の灰」とよばれる降下物になったり、「黒い雨」とよばれる泥雨にまじって降ってきたための放射能、④土地や水などに残っていた放射能、の四種類がある。

放射能は、目に見えない。それを浴びたからすぐ血が出るわけでもない。しかし、放射能が肉も骨も貫通するときに、人間の細胞になんらかの重大な作用をおよぼすのである。

たとえば、レントゲン線を思いおこせばよい。あれは人間の細胞を貫通するが、貫通力は原爆の放射能とくらべれば弱い。だから、うしろに写真の乾板をおいてレントゲン線を放射すると、骨とか、内臓とかの姿が白く写るのである。骨も内臓も貫通する放射能であ



提供・連合

れば、乾板にはなにも写らず、真っ黒になるはずである。

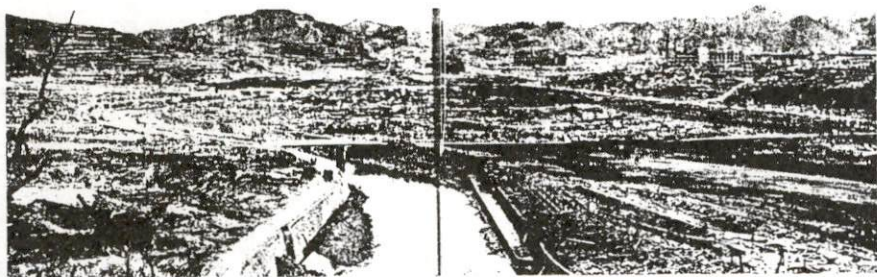
広島・長崎の被害

人間は七〇〇ラド（ラドは放射能を測る単位）の放射能をうけるとかならず死に、三〇〇ラドだと半分の人死にといわれる。私たちはいつも宇宙からも放射能を浴びているのだが、その量は一年に〇・一ラドである。爆心から五〇〇メートル離れていて広島では六〇〇〇ラド、長崎では七〇〇〇ラドの放射能を浴びた。三〇〇ラド、すなわち、半分の人が死ぬ放射能を浴びた地点は広島で爆心から一〇〇〇メートル、長崎で一二〇〇メートルといわれている。

小太陽から発したもののすごい熱、爆風、放射能が広島・長崎をおそった。人びとは、大やけどをし、爆発でたたきつけられ、本人たちはわからなかったであろうが大量の放射能を浴びたのである。

昭和二〇（一九四五）年一二月までの間に広島では約一四万人、長崎では七万人が死亡したと推定されている。当時市内にいた人のほぼ四分の一は、当日またはそれから三か月以内に死んでわけである。二つの市は、爆心地を中心に徹底的に破壊され、その上を大火災の炎が荒れ狂った。そして、ほとんどなにも残さない町の姿となった。

二つの都市は、奇襲によっておきた原爆投下で一瞬に（奇襲瞬間性）、戦闘員・非戦闘員、老若男女をとわず（無差別性）、人間と他の生物、人工の施設・自然環境をとわず（全面性）、殺りく・破壊された。生き残った被爆者は、からだ・くらし・こころのすべての面で被害をうけ（総合性）、被害はその後もとどまるところなく持続し、ときには拡大した（持続拡大性）のである。とくに注目されるのは、子ども・婦人・老人、いわば弱い者がたくさん死んだことである。



提供・連合

被爆者の 闘い

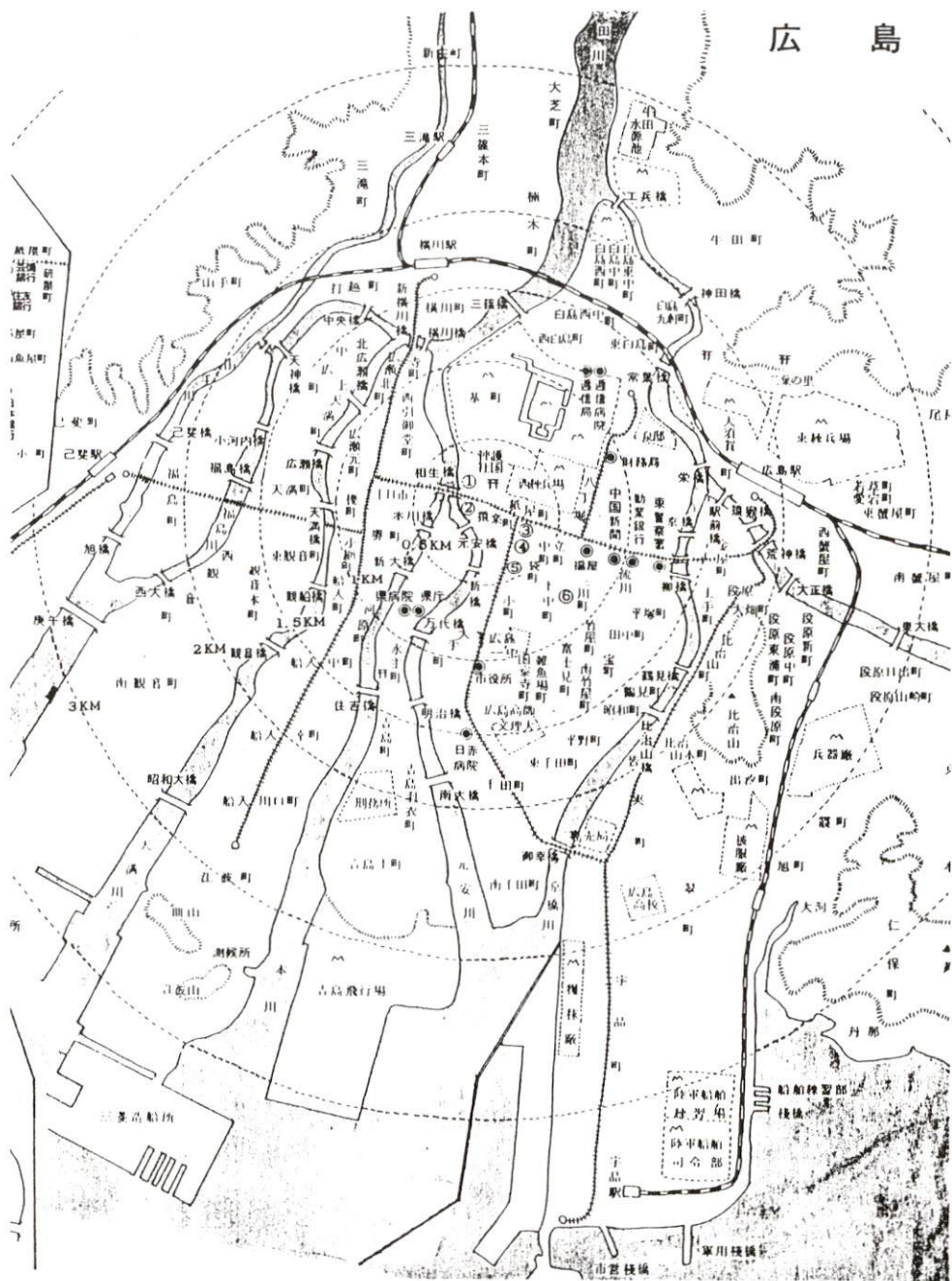
原爆によって、身寄りや財産を失い放射能の病気に苦しむ被爆者にたいして、終戦後さらに講和条約で日本が独立した後も、アメリカや日本政府はなんの援助の手もさしのべなかった。被爆者たちの地獄の苦しみは、自分のせいではなく、国が起こした戦争のなかで非人道的な原爆投下によって起きたのであった。被爆者たちは、自らの苦しみにたいして、日本国家やアメリカが当然責任をとるべきであると考えた。同時にその苦しみをだれにも二度とあわせてはならないという思いにかられた。一九五五年の第一回原水爆禁止世界大会を機会に、被爆者たちは全国各地に被爆者の会をつくりはじめ、五六年にはそれらがまとまって、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）を結成した。

日本被団協は、被爆者たちの思いを二つの要求にまとめた。第一に、核戦争をやめさせ核兵器を廃絶すること、第二、「原爆被害者援護法」を国の責任で制定することである。

「原爆被害者援護法」の制定は、国が戦争責任をみとめ、同時に将来、核戦争に国民をまきこまぬ決意をこめて、原爆による死者に弔意を表わし、被爆者が失った健康や生活への補償をする法律をつくれという要求である。政府は被爆後一二年たった五七年、やっと被爆者の健康に関する法律を制定したが、援護法の制定は拒絶しつづけている。

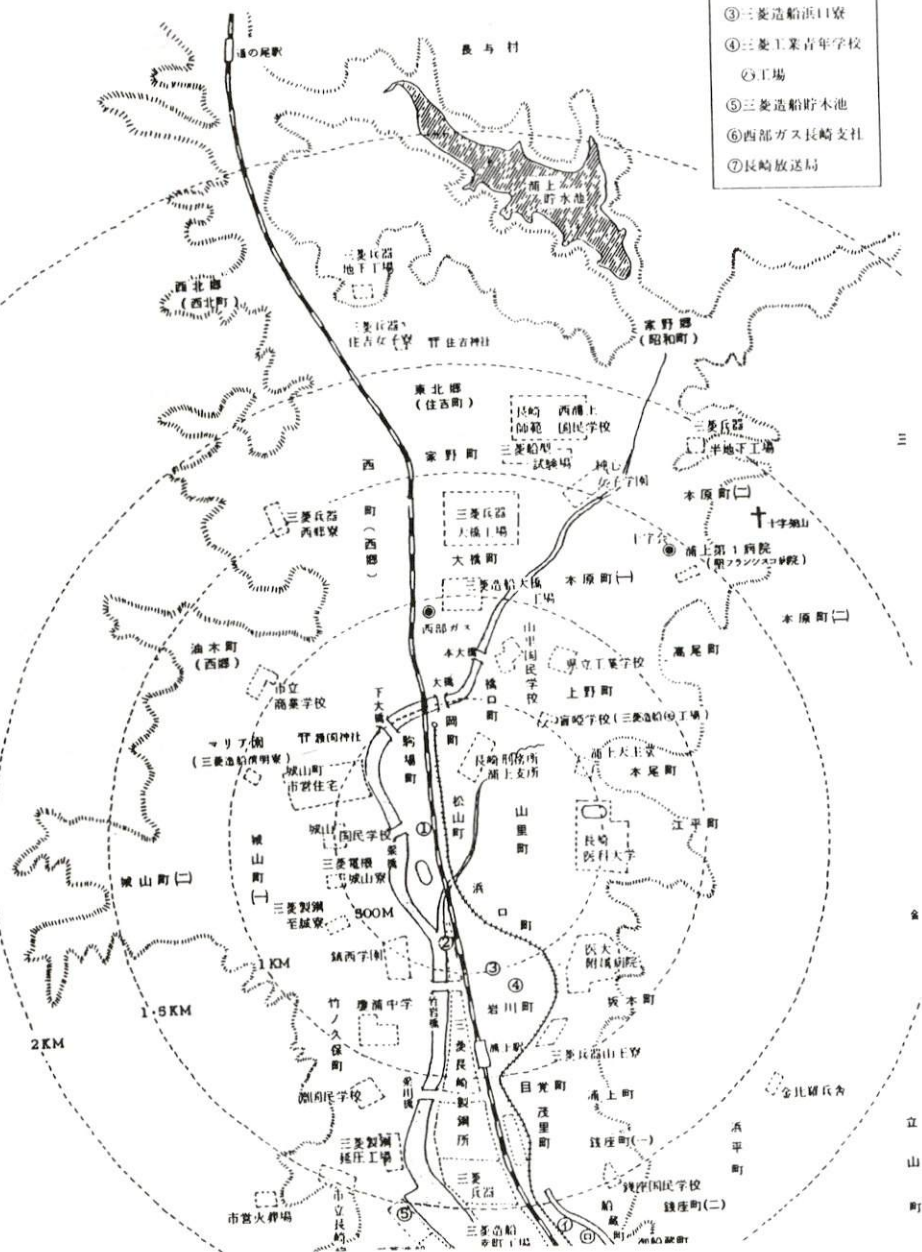
（岩波ジュニア新書 伊東 壮著『新版 一九四五年八月六日 ヒロシマは語りつづける』から）

広島



長 崎

- ①三菱造船船塢寮
- ②三菱電機鋳造工場
- ③三菱造船埠頭寮
- ④三菱工業青年学校
- ⑤工場
- ⑥三菱造船貯水池
- ⑦西部ガス長崎支社
- ⑧長崎放送局



逆流をこえて自立と連帯を

シン
辛

ヨン スウ
泳 洙

(広島、『被爆朝鮮・
韓国人の証言』より)

私はいま韓国原爆被害者協会の新会長としての
重責をになわされています。

日中戦争が太平洋戦争へとエスカレートしてい
った昭和一六年、私は京城(ソウル)の韓日合弁
会社、東栄製薬に就職し、日興製薬に移り、広島
に赴任しました。年々強化される国民総動員体制
の下で、徴兵、徴用があいついでおり、私もまた
それに組みこまれるのは必至でした。それで、こ
の会社が暁部隊の指定工場なので、そこなら現場
徴用ということですむ、と見込んでの就職でした。

一九四五年八月六日八時一〇分ごろ、私はいつ
ものように十日市町の会社へ出勤すべく、幟町の
電停で電車を待っていました。するとB 29が二機
か三機、はるかに上空を通過しました。さほど気
にもせずに立っていると、次の瞬間、ピカッ／＼と
強烈な閃光を見ました。とっさにその場に伏せた
が、あとはわからない。気がついて足を動かして
みると動く。「ああ生きている」と思って、どう
にか立ち上がり、広島駅の方に向かって走ったの
です。

大通りはあちこちの路地から出てきた人々がい
っぱいで、焼けただれ、両手を宙ぶらりんにした
人々の群れが駆けていく。髪をさか立てた半裸の
女、頭から血を流して顔と全身を血だるまにして
いる男たち、男か女かわからない幽鬼のような
人々の群れが、うつろな足どりで東の方へ流れて
いくのです。不安になって自分の顔に両手をあて
てみると、目も鼻も口も融けて顔全体がまん丸い

スイカのようにはれあがっています。交番の前を通ると、巡査が石油缶に入れた油をくれたので、それを両手で顔一面に塗りつけました。

そのあと国泰寺の方へと歩きだしたが、もう火の海で熱くてそれ以上は進めない。宇品の方へ行くと、途中でトラックに出合ったので、それに乗せてもらって宇品海岸について。最近になってそのトラックが韓国人志願兵たちの救援トラックだったことが、『広島原爆戦災誌』を読んでわかったんです。

私はそのあと、どこかの村の国民学校に収容され、兵隊と国防婦人会の人たちの看護を受けました。火傷した顔からウミと血と汗が流れるので、パンツ一枚で仰向けになり、顔には油紙をかぶせて口のところだけ穴をあけ、おかゆを食べさせられたのです。それでもハエがとまるのか、左の耳の穴にウジがわいて、いつも耳鳴りがするので、耳の穴をはじくってもらったことがあります。そ

れに毎日一回、マラリアのような高熱が出ました。周囲でどんどん死人が出るので、私も生きた心地はしないのです。

そのあと同じ町の旅館に開設された陸軍病院に移され、ここではじめて本職の軍医と衛生兵が見てくれたが、ここは名ばかりの病院で、何らの医療設備も薬もないのです。

この陸軍病院で八月一五日を迎え、戦争が終わったことを聞かされたが、私には、ただ自分が生きて故郷に帰れるのかという心配が先にきました。敗戦に落胆する日本人と解放を喜ぶ韓国人との間に衝突が起きて、どんな危害が加えられるかもしれない、そう思ったんです。

ある日のこと、私の顔に薬を塗っていた兵隊が、「おまえは朝鮮か」ときいた。私はとっさに「いや」と否定したんです。私が韓国人だと見ぬいていたはずだが、彼はそれ以上追及しなかった。私は自分がそう口走ったことで、ひどく複雑な気持ち

ちになりました。そのうち病院も閉鎖するというし、私も次第に回復してお腹もすくので、そこを退院しました。広島は全滅しているというので、会社の専務の家財道具が疎開してある佐伯郡八幡村の土井精米所を訪ねるつもりで、近くの駅から汽車に乗りました。

ピカに灼かれ、死の谷間から必死に這いあがろうとした日々には私をうちのめしたものの、それは単なる原爆の脅威だけではない。まさに人間による人間の侮蔑（ぶべつ）、祖国の名さえ明かすことのできない民族の悲劇でした。私たち韓国人被爆者にとって、ヒロシマの地獄とはそういうものだったのです。

その後、私は八幡村から廿日市に設けられた救護所に移って傷ついた体を癒し、その年の暮れに帰国しました。肉親たちはお化けのように変身した私を見て、みんな驚き泣きました。戦闘帽をかぶっていたので頭の半分は助かったが、顔面から

首にかけて火傷し、左耳は融けてなくなっていたのです。以前に働いていた製薬会社は解散になったので、親兄弟と百姓をしながら、どうにか暮らしてきました。もちろん、日本の収奪と戦争によって韓国は疲弊（ひへい）しきっており、そのうえに六・二五動乱、ベトナム戦争での出兵と、きびしい試練を受けてきたので、日本の国民とくらべれば比較にならない苦労を重ねてきました。

一九六五年、韓日条約による有償無償五億ドルの賠償で、日韓両国政府は一切の過去を“清算”することになりました。これには韓国と日本、それぞれにきびしい批判の声がありました。「祖国統一も実現せず、日帝三六年の強盗的占領と収奪の代償が、わずか無償三億ドルとは何ごとか」という韓国国民の痛烈な叫びがそれです。

さいわい日本の良心的知識人やジャーナリストたちによって、私たち韓国人被爆者の問題が取りあげられ、韓国から日本、世界へと報道され始め

ました。

運動について語ればきりがありませんが、私自身のことを一つだけつけ加えますと、一九七四年夏、東京の南雲外科病院長より招致治療を受けることになって、五反田の南雲病院で二時間半かけた整形手術を受けました。右首のケロイドを切除して、左脚のものも皮膚をとって移植し、また義耳を左の耳につけてもらったのですが、このときに東京の現代人社や広島の豊永恵三郎先生らの尽力で、東京都より被爆者手帳が交付されました。

現在、韓日両国政府の合意で、被爆患者の渡日治療と医師の相互派遣などの三項目が決められ、すでに第三陣までの渡日治療が実現しました。これは長年の願望の一部が達せられたもので、まことに嬉しいというべきかもしれません。しかし、年間五〇名、しかも二カ月間家族を置いて渡日できる人で、ある程度治療効果のある人、という枠がはめられると、きわめて厳しいことになる。

これでは重症者、貧窮者は除外され、百年たっても五千人しか治療できないわけです。

問題の根本は、日本政府が韓日基本条約を盾に請求権の消滅を主張し、平然と私たちの補償要求を拒否しているところにあります。この点では、世界人権宣言や日本国憲法の精神さえ踏みにじている日本政府の反道義的な姿勢こそ、第一に正さねばなりません。もちろん、アメリカ政府も原爆加害の道義的責任を回避することはできません。

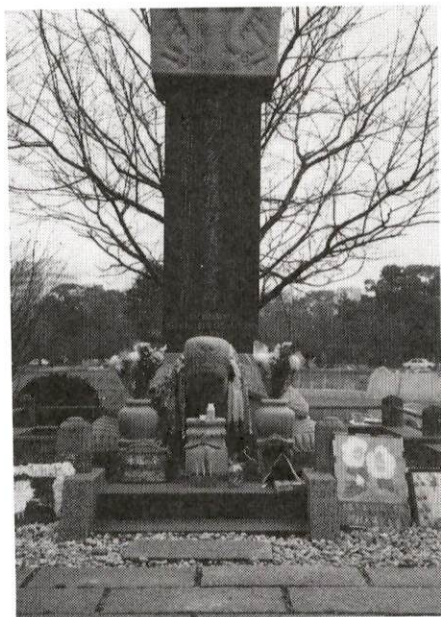
だが同時に、韓国人被爆者への補償・賠償と治療、救済、生活保護等は、当然、韓国政府が責任を持つべきなのです。一九六五年の韓日条約があり、日本政府への請求権放棄があるかぎり、韓国政府による肩代わりの補償措置が必要となります。たしかに韓国の国内事情——経済的困難、被爆への理解欠如もありますが、この点ではむしろ私たち被爆者自身の自己主張が弱かった。私たち自身の非力と無能、自己の被害を運命のせいにして諦

念する告発精神の欠如、自立精神と団結力の不足をこそ責めるべきではないのか、と思うのです。

ふたたび被害者協会の会長に選出されて、私がいま切実に考えているのは、「韓国の被爆者はこじきではない」ということです。かつて私は、日本の核禁運動が一日も早く統一団結して、民族を超越した汎人類的な運動になることを訴えてきました。第一回、第二回と重ねられる国連軍縮特別総会への日本代表団の参加と八千万署名等は、長年の私たちの願望がすこしずつみのりつつあることを示すように思います。

しかし、私たち韓国の被爆者と国民はどうか。かえりみて内心忸怩（じくじ）たるものがあります。核戦争になれば、国家も民族もあったものではない。人類全体が滅亡します。核大国の強引な軍拡が続く、危険は迫っています。かつて日本国民が、そして韓国人とアジアの民衆が歩まされたこの道を、ふたたび歩まされるのはごめんです。

前途に立ちふさがる強大な壁を乗り越えるために、私たちはひとりびとり裸の団結をかため、残された力をふりしぼって、人間復権と自立を遂げたい。そして、そのためにこそ、日本と世界の友人たちの力づよい支援と連帯を期待したいのです。



▶「韓国人原爆犠牲者慰霊碑」。広島市の平和公園の外に建てられ、差別の象徴として注目されていた。こし四月、訪日した韓国被爆者訪日団の強い要請により、広島市は、こし八月六日までに、平和公園内に移転を約束した。

私の一生のお願いです

李イ 一イル 守スウ

(広島、親江会だより
九九号より)

広島で、私は一六歳のとき被爆しました。青崎国民学校高等科を卒業して、動員で東洋工業に勤め、向洋に住んでいました。

八月六日は、町内の組長から建物疎開の勤勞奉仕に行くように言われ、近所の人たちと大州橋手前の三つ星製薬工場付近まで来たとき、原爆にあったんです。急に空が真赤にそまり、「アレッ、なに」という間もなく稲光りの激しいようなものが走り、吹きとばされました。

父は日本名を伊藤三郎といい、土方の請負士をしていて、あちこち転々としたので、私は日本の

どこで生まれたのかわかりません。父は、ダムをつくったり、軍のために大きなトンネルを掘ったり、あの頃は似島に軍基地の設備をと、岩山を掘った石を崩してこまかく砕き、舟で運んでいました。私は日本で生まれ、日本人の気持ちでしたから、小さいながら、日本人と一緒に草刈りから工場での学徒動員でも、一生懸命働きました。サイパンが落ちたときは、みんなで校庭にかたまって「がんばろうねえ」と泣いたんですよねえ。そんなことから、原爆をうけても、日本の敗戦は悔しく、韓国に帰るのも悲しい思いでした。

帰国しても言葉はわからないし、生活習慣もちがうので、小さい子にまじって学校に行ったけど、馬鹿にされ、なさけない限りでした。それから朝鮮動乱があり、そのとき陝川にいたので戦場になり、大変でした。北が村を占領すると、南の軍が飛行機で爆撃してくるし、南が占領するとその逆で、どちらにしてもそこに住んでいる人が恐ろし

い目にあう。ほんとうに戦争はいやです。

結婚してから知ったのですが、夫は長崎造船所で被爆していました。母は戦後五年ぐらいて、ガンで死亡。その後、夫も病死。私は三人の子供をかかえ、口では言えない苦労の連続でした。私自身も、何だかわけのわからない病気に次々かかり、ずっと体の具合が悪く、漢方薬をのみ続けてきました。

父のことですかのほりですが、関東大震災のとき東京にいたそうです。朝鮮人がみな殺されかかり、父も追われて逃げ、見も知らぬ日本人の家に逃げこんだら、そこのおばあさんが「かわいそうに、朝鮮人といっても同じ人間なのに」とかくまってくれて、助かったそうです。父はその人のことを生涯の恩人といって、東京に行くたびに訪ねていましたが、もうその父も死没しました。

日本政府に言いたいことは、同じ日本人として、その日、一緒に被爆した私たちだから、日本人と

同じように扱ってほしい、ということでした。手帳を出してもらって、手帳さえあれば、病気を治療してもらえるようにしてほしいのです。とにかく、日本の被爆者と同じようにしてもらいたいです。私の一生の願いです。

(韓国・釜山在住)

裸で三日位

歩いておっただんです

イ
李 貞 秀

ジョンス

(広島、『ヒロシマ・ナガサキ』
を考える』二九号より)

一九二〇年一月九日生まれですから、二六歳のとき原爆にいました。結婚しておりました。

四つとき、日本に渡ってきました。広島吉島に來たんです。韓国の陝川に生まれて、お父さんが先に日本に来ていたので、お母さんと一緒に

後から渡ってきました。三人姉妹で私は真中です。

私が来た頃は、あまり韓国のもはおらんで、己斐一人、舟入一人、もう一人おったけれど、逢うたら互いに嬉しがってね。ところが二、三年おったらもう、わあっと来たんじゃけえね。

朝鮮人、朝鮮人いうて子どもらはいじめよったです。「朝鮮人エエエツ」とペロ出しながらいじめるんですよ。いじめられると、憎いやら、はぐいやら、腹立つですよ。どうしたらうちら朝鮮人なんかあったかな思うてね。そのうち弟二人できて、五人姉弟になりました。

八月六日は、家（舟入本町）におりました。腹が痛うて工場へ行かずに寝とったんです。それでピカ落ちるのも知らなんだんです。目つぶっとったので何も分からん。それで目を開けてみたら、下敷になっていて。はじめは暗うて何も見えない。そのうちすうっと夜が明けるようになって、あり

や家だけバラックじゃからつぶれた思うて、家だけ爆弾落ちたあいうて隣の人呼んで、屋根がトタンだったきにね、それでも大きな板で押さえとるから、なかなか出られないです。どうして抜かれたか分かりません。上がろうにも穴がない、頭つつこんでみたり、腕をぐうっと上げてみたり、夢中であがいて、その時は単服着てたんですが、出られた時には、服はぼろぼろ真っ裸になっていました。そして上がってみりゃ、みんなじゃ。

お父さんも下敷になっていたので、「お父さん、早よ上がんなさい、上がんなさい、手を出して手を出して」いうて、手を引っ張ったら、足がもげるいうんです。「足一つ切ってきてもいいきに、早よ上がんなさい」いうて引っ張り出したたら、もう足はずうっと割れてね、顔は分からんようになって。栈橋渡るところに舟入病院があった。そこに広い庭があったから、お父さんそこへ引っ張っていつて、また息子探しに歩いた。舟入神崎小

学校の一年生だったんです。学校行く時間じゃからね、学校行ったら子どもおらんでしょ。一所懸命尋ねて、家も倒れとるから場所がなかなか分かんらん。やっと尋ねあてて。「お母ちゃん爆弾落ちて死んだよ」いうて、お祖父ちゃんのところに行っておったんです。

下敷きになって上がったばかりの時には、大きな粒の雨が降って。黒い雨ふって。

そいで息子がみつかったら、今度は火事じゃ。

広場に丸く火がついて逃げるところがない。うちのお父さん頭も顔も足もひどいの、それでも生きようと思って逃げる、厳しいもんですよ。死にとうないのよ。逃げるところがないから川へ逃げる。

川へ行ったら船はいっぱい、みんな乗っとるの。

船乗してくれんよ。潮が干いたったけえ川の中へ入って、お父さん砂の上に寝かしといた。「水クレ水クレ」いうても水ありゃせん。砂を掘ったら水が出てきた。のましてあげてね。

弟がおらんで弟を探しに出たけ。弟は二人おってね、高等科の二年と一年でした。二人とも建物疎開の勤労奉仕に行っていたけど、一人は下敷きになってから抜け出して、自分の足で帰ってきました。大きい方が天満町の方へ行って帰らん。翌く朝、従兄の兄さんと二人で天満町の会社まで行ったら、足を怪我しておった。生きとるけん、うれしくて泣きました。兄さんも、「生きとったかあっ」いうて泣いてね。

その弟は、翌く年に亡くなりました。自力で帰ってきたほうは四九歳で死にました。肝臓ガンです。お父さんは一〇年くらい生きて死にました。

韓国に帰ったのは一一月。帰ってまた往生しました。

みんなで帰ったけ、食物でね。親戚もはじめは色々してくれても、一月二月たったらみているだけだし。往生しました。

動乱の時は、田舎じゃから逃げたりはせんが、北の国が来て、三か月ほど御飯を炊いてあげました。昼は家において夜行くから。あの人ら、夜戦争じゃから昼は寝とる。家入って、鉄砲掃除したり、しゃべったりね。

そのうち、うちとこの山でね、戦争場ができとる。若い人をみな連れて行くんよ。何もしらんに。アメリカの人も見えるし、韓国の軍人も見えるしね。おかしいで。若いものみな連れて行くし、どうなったやいうて。

三日くらい、爆弾がばかんばかん落ちるんじゃ。近く落ちるときはヒュンヒュンヒュンいうて恐ろしい。シューシューシューいうたら遠くへ落ちる。落ちたら海みたいな穴が掘れるんじゃけ。二、三日そこでタカタカタカやりよったが、みな南の軍人が負けて降りてしもうて、北が来た。

孫は五人、弱いのもおるし元気なのもおるし。

息子はあまり元気じゃない。

孫は二三歳、二一歳、一九歳、一七歳、一四歳。一番上は大学生、頭でがんばりよる。



この写真の青年・韓富相さんは、李貞秀さんの孫で、88年10月来日したとき追悼碑を訪れた。

爆者をつくるなのねがい

批准書を交換

(米ソ首脳)



・2000年までに核兵器の廃絶を!

6月11日 ニューヨークで10万人以上の大デモと集会 (全米連合)



アメリカ合衆国

国際連合本部

・強まる海洋での核軍拡競争

日本周辺の太平洋 日本海は米ソの核対決の危険が増大



・非核憲法制定に 続いて非核法案を可決

(オーストラリア議院)

ナム

・非核法を制定

(ニュージーランド)



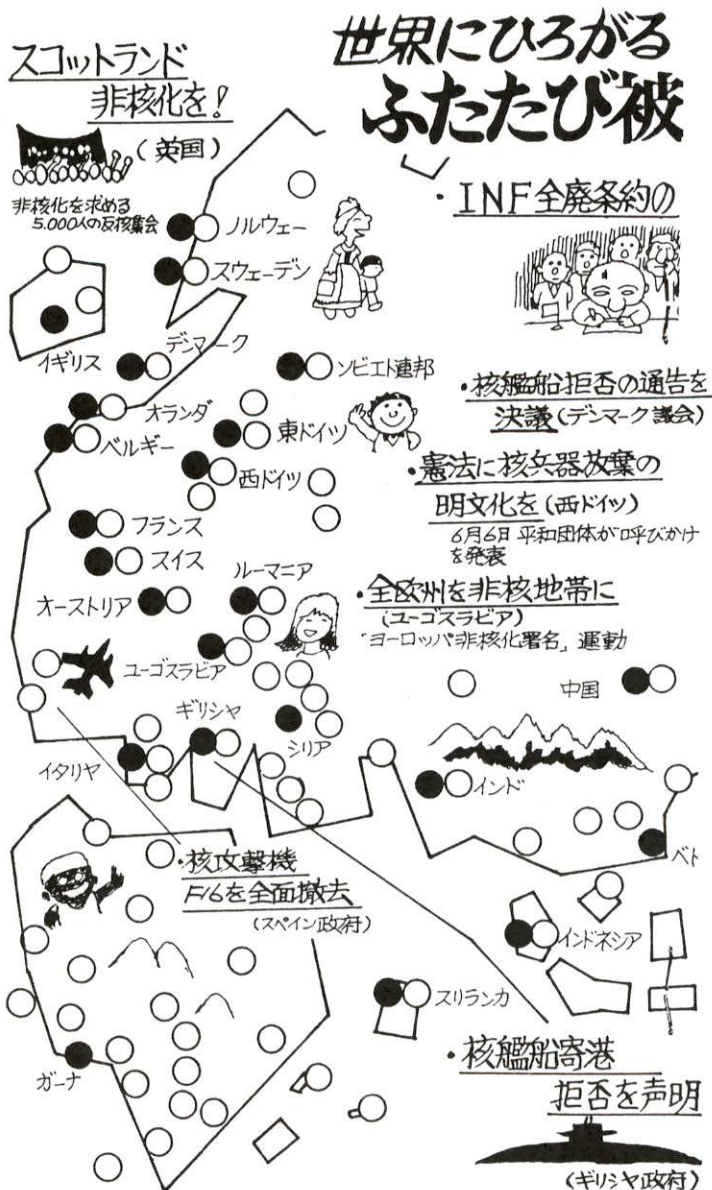
● 被団協代表の行った国

○ HIBAKUSHYA パンプが普及された国

都道府県別被爆者数

(1988.3.31現在)

北海道	665
青森	118
岩手	120
宮城	301
秋田	90
山形	114
福島	167
茨城	560
栃木	350
群馬	282
埼玉	2,376
千葉	3,508
東京	10,325
神奈川	6,069
新潟	233
富山	139
石川	207
福井	187
山梨	128
長野	243
岐阜	708
静岡	1,057
愛知	3,797
三重	791
滋賀	487
京都	1,707
大阪	11,539
兵庫	6,376
奈良	937
和歌山	533
鳥取	801
根拠	2,711
岡山	3,602
広島	167,972
山口	7,050
徳島	562
香川	887
愛媛	1,871
高知	403
福岡	10,420
佐賀	2,371
長崎	100,186
熊本	2,562
大分	1,264
宮崎	1,064
鹿児島	1,712
沖縄	379
合計	359,931



日本原水爆被害者団体協議会発行

『あなたは核戦争を受忍できますか』より

はとになって

川崎 加寿子

(被爆二世(小五)、86・7・20)
追悼式で田部季之君が朗読

はとになって

この世にせんそうがなければ

はとになって

どんなにいいことだろう

はとになって

死んだ妹や弟の所へ

はとになって

死んだ姉や母の所へ

はとになって

へいたいにとられた父や兄(あに)の所へ

はとになって

みんなの所へもどりたい

はとになって

みんなで遠くへ行きたい

はとになって

せんそうで死んでしまった父や母や姉や兄や弟や

妹を

はとになって

かえしてほしい

はとになって

おおぜいの人を死なせたせんそうがにくい

はとになって

おおぜいの人を死なせたげんばくがにくい

はとになって

この世にせんそうがなければ

はとになって

いまごろみんなでいっしょに生活しているだろう

はとになって

この世にせんそうやげんばくがなければ

はとになって

どんなにいいことだろう

はとになって

どれだけおなかをすかしていただろうか
はとになって

どんなにくるしいせんそうだったか

はとになって

わたしはしらない

はとになって

親は子をうしない

はとになって

子は親をうしない

どんなにさみしいだろう

はとになって

もうそんなさみしさを味わいたくはないだろう

はとになって

もう一生せんそうをおこしたくないだろう

はとになって

もうこんなさみしさはぜったい味わいたくないだ

ろう

原 ば く

中山 美 里

（被爆二世（小五）、87・7・19）
追悼式で発表



私は、『あの日から生きて生きて』という原ばくの
本を読んで、初めて長崎と広島に落とされた原ば
くが、どれほどこわくおそろしい物だったかを知
りました。たくさんの人たちが、もえさかる火の
中で苦しみながら死んでいたり、強い光を見て
目がつぶれたり、そして、やけどを負い、水を飲
ませて下さいといって歩いていたり、原ばくしよ
うになるとも知らないで、何日も何日も焼けあと
を両親をさがして回ったりしたことが書いてあり
ました。

私のお父さんは、原ばくが落とされた時は、ま

が一歳にもなっていないなかったので、その時のことは何も知りません。だから長崎の原ばくのは、あまり教えてもらえませんでした。でも、お父さんは、八月九日には、ばく風で飛ばされてきたトタン板がお父さんのねていた場所につきささりました。でもお父さんのお父さんが、いちはやく他の場所に抱いていったので、命が助かったそうです。その時にもし、お父さんが死んでいたら、今はここにいません。でも、おじいさんは、私が生まれる一年前に、ひばくによるガンで死んだそうです。

なぜ、戦争が始まったのでしょうか？ 私は、どうして戦争が始まったのか、原ばくが落とされたのか、まだわかりませんが、戦争は大きいです。日本では、絶対に戦争をやってもいいくありません。今では、広島と長崎に落とされた原ばくより、何十倍、何百倍もあるばくだんが、作られているそうです。

そしてそのばくだんが日本に落とされたら、日本中の人間はみんな死んでしまうと思います。また世界中のいろんな所に落とされたら、きっと地球に住んでいる生き物は、全部、死んでしまうかもしれません。私は今、戦争をやっている所は、もう戦争をやめてほしいと思います。戦争は、人が死ぬだけで、何のやくにも立ちません。私は世界中の小学生と友だちになり、仲良くなりたいと思います。大人の人たちも、世界の人たちと仲良くしていくと、二度と戦争はおこらないと思います。

絶対に、戦争は、やらないで下さい。原ばくは、作らないで下さい。



子と母する花献

今、平和を考える

吉村 博 光

(被爆二世(高三)、87・7・19)
追悼式で発表

いま、私たちがしなければならぬことは何でしょうか。人類の頭のなかから、戦争ということを忘れさせるには、人々に戦争の恐怖を強く知らせること、そのために、しばらくは、核や戦争の恐怖を人々の脳裏に強く焼き付けるようにすることが必要だと思います。そうやって、先ず、戦争は怖くて出来ないという状態にすれば、武力解決をしてはいけないんだという社会になって、膨大な時間はかかると思いますが、次第に、戦争をやるうなんて、全然思い浮かばない社会になると思います。

核や戦争の恐怖を訴える、これに世界で一番に貢献できるのは、疑いなく唯一の被爆国である我が国です。国際協調社会実現のために、我々が先ずしていけることは、目いっぱい人々に核の恐怖を訴えることです。そして、戦争を忘れた理想の社会になったら、次に、人類の生存のために目障りなのが、核という物質自体です。核兵器は、誰が見ても明らかに人類の敵ですし、また、兵器ではなくても核燃料を使用する原子力の利用についても、一瞬の益はあるかもしれないが、次第に自然を破壊して、結局は人類生存の妨げとなるものです。

それは、自然の生態系にはいり込んで大変な害を及ぼした、かの強力殺虫剤DDTの使用の果てを見ればおわかりになるでしょう。人間は自然のなかに生きているのですから、自然を壊すものは、全て、人類生存の妨げとなるものです。核はその筆頭です。ですから、戦争の恐怖の伝承活動と並

行して、核廃絶運動を進めていかなければなりません。

自然の面からみても、戦争の面からみても、人間生存の危機であるいま、その打開のために、我が具体的に進めていくべきことは、戦争の恐怖の伝承活動と核廃絶運動です。頑張っていきましょう。

「滝野公園原爆追悼碑」を

見学して

伊 嶋 裕 一

（高二・江戸高、89年）
修学旅行文集より

展示内容 — 展示してあったのは、原爆犠牲者追悼碑、建立のことばの碑、広島市・長崎市から贈られた原爆瓦、平和の鐘の四点セット。原爆瓦

には、広島市、長崎市から贈られ、それがどういったものかという説明が添えてあり、建立のことばの碑には、広島、長崎へ落とされた原爆のことと、「原爆（ピカ）は人が落とさなければ落ちてきません。この碑によせる人々の心が、平和の礎となることを念じて」という言葉が刻んであった。

感想 — 自分が物を知らないせいかもしれないけれど、江戸川区民なのに追悼碑があることも知らなかったし、ひねくれた考えだけど、本当に「この碑によせる人々の心が平和の礎となることを念じて」建てられたのなら、すぐそばにある親水公園の案内図でも「滝野公園」とだけしかないのはおかしいと思った。似たような意味をもって残された「第五福竜丸」などは、ある程度年の人ならば、その存在も意味も広く知っているのに、この碑の存在は大して知られていないように思う。本当に、「この碑によせる……」と願い、考えるならば、この碑の存在はもっとよく知られ

るべきではないかと思った。

最後に、この物騒な世の中でも、こうして少しでもこの碑のことを考えることが、本当に平和の礎になるのかなと、思います。

平和の誓い

川 俣 尚 貴

(高二・江戸高、89年
修学旅行文集より)

私たちは中学生の時から、被爆した広島について、さまざまな話を聞いてきました。その頃は、広島は悲惨だったとか、被爆された方々はかわいそうだと思うだけでした。

そして、江戸川高校に入學して二年間、広島について多くのことを学んできました。江戸川高校は、一〇年程前から、修学旅行の目的としての平

和学習を続けています。先輩たちがそうであったように、私たちも広島を通して、平和の意味を理解してきました。

小説『黒い雨』や『夏の花』などの原爆や太平洋戦争についての本を読んだり、映画「黒い雨」や「核戦争後の地球」を鑑賞して、原爆とはどんなものか、落とされた直後の状況はどんなものだったのか、まのあたりにした衝撃は強烈でした。

ビキニ島沖水爆実験の犠牲になった第五福竜丸を見学したり、私たちの学校のある江戸川区の滝野公園内の原爆犠牲者追悼碑にお参りして、自分たちの身近に被爆に関わる跡があることを知りました。さらに、江戸川区に住んでおられる被爆者の方から、一七歳の八月六日の体験を伺い、同じ一七歳である私たちとのあまりの違いに胸を痛めました。

広島のパネル公園内にある碑の一つひとつの由来を調べて、お話をして下さる方はどんな生き方を

送られてきたのかをも資料で知りました。養護ホームを慰問するため、出し物を練習したり、手作りの贈り物に精を出したりしました。三万六千羽の千羽鶴を四七〇人全員で一羽一羽を心を込めて折りあげました。私たちはこのような事前学習を積み重ねて「広島」にやって来ました。そして、「ひろしま」を自分自身の目で見ました。「ヒロシマ」で被爆された方々からお話を聞きました。これからは、この「HIROSHIMA」が私たちにとってどうあるべきか考えていかななくてはなりません。

原爆は、長崎にも落とされました。今でも世界各地で核兵器の実験が行われています。その核兵器は広島・長崎に落とされたものの四〇倍もの威力があります。さらに、チェルノブイリ原子力発電所の事故のように、核燃料による放射能汚染は、全世界の問題になってきています。いまや環境汚染による地球の破壊が、日毎に進んでいます。人

間が生きる地球を破壊するものが、必要でしょうか。人間同士のつまらない争いで、人間が生きる場所を失ってしまっているのでしょうか。昨年の秋から、世界は大きく変動と共に動き出しました。アメリカとソビエトのINF全廃条約や、東西ドイツの結びつき、ソビエトや東ヨーロッパの民主化のように、人々は平和の道を歩み始めたのです。私たちは、「HIROSHIMA」のある国で生まれて育ちました。この国は、被爆した都市を持つ国であると同時に、大陸を侵略した加害者でもあるのです。侵略や差別という影の部分にも、しっかりと心を向けて、痛みと共に二一世紀の人間のあるべき姿を、平和の中に探求していこうと思います。人間の痛みを知り、平和を守って、次の世代に受け継いでいくことを誓い、誓いの言葉といたします。

最後に、原爆でなくなられた方々のご冥福をお祈りいたします。

チェルノブイリ

5万人が重い障害

被ばく者 汚染除去に60万人
大会で報告

【キエフ（ウクライナ共和）十七日（松本 健）記者】一九八六年四月二十六日に起きたソ連・チェルノブイリ原子力発電所の爆発事故に關し、十七日まで三日間、ウクライナ共和の首都キエフで、チェルノブイリ被ばく者第一回全ソ大会が開かれた。大会での報告によると、①事故の後、原発施設の放射能汚染の除去に參加した人は、合計六十万人に上ると、その大部分が、兵隊の再訓練を連

由に徴用された二、三十歳の若い民間人だった。約五万人が、重い放射能障害による病気に侵され、すでに二百五十人に一人の割合で死んでおり、残された人々も病気の恐怖に關つては、一など、事故による放射能汚染がこれまでの公式発表以上に深刻な人体への影響を及ぼしていることが、初めて明らかになった。

大会を主催したチェルノブイリ同盟は、事故のあと除染作業に參加した人々が重い障害に苦しんでいるのを支援するためにつくられた民間団体。これまでにバラバラだった組織を統一し、ようとう十五日から第一回大会を開き、各地から千人を越す代表が集まった。

これまでに除染作業の実態は、ソ連国防衛省に担当していたため明らかになっていなかった。しかし、大会では作業の参加者は六十万人に達することのほか、うち四分の一が正規の軍人、兵士で、残りのほとんどは「スラレ」と呼ばれる民間人だったことも明らかにされた。

最初の二カ月間ほどは国防軍の化学的兵器防衛部隊の兵士たちだったが、その後は、四十五歳までの民間人に義務づけられていた再訓練を目的に、全土から招集されていったという。大会に參加したワトビア共和の代表、テリゲイ・ピルコフさん（五十八）は、その時は、二年。残された時間を仲間のため

に「さげたい」と片目をひき、下、白血症を苦しんでいるという。ピルコフさんが參加するワトビアの同盟支部の調査によると、除染作業に加入したワトビア人は五千五百人。そのうち九人が自殺、二十六人ががんや白血症などで死んだ。さらに、千人が頭や血のがん、免疫低下、ピルコフさんを選んだ。



第一回チェルノブイリ被ばく者全ソ大会会場内に書き出された犠牲者の名
17日、キエフ市内で、花井喜喜子（右）が、

追悼碑に眠るひとびと

若林敦子 井上美智子 村井富千野 田辺洋偕 田辺令偕 平沢隆三 平沢梅代 村上孝子 高田久代 水野三千枝 野村建太郎 山本昭男 田部トメ 田部精子 田部文子

小野静 山田スマ 木村文子 木村みどり 木村クラ 木村一ツ 桧山ツネ 米谷卓男 米谷武彦 米谷博子 米谷芳 米谷卯一郎 林和子 林きくの

中山イツ 横張三郎 吉田盛人 横山敬郎 中村義子 中村茂 後田芳雄 稲田英雄 中村岩吉 杉原友之 川崎美男 川崎小一 無名少年 高木成子 高木恵子

永田力太郎 中島登 中島もみ 田口コメ 申島之彦 中島ふじ 立川政太郎 深江信保 新道安五郎 宮田君枝 青木ユキ 青木由太郎 半田スナ 中村好秀 中山藤太郎

松本 広次 岩村 岩吉 松本 末子 力久 力 金岡 俊夫 西田 福松 堤 礼子 高尾 福雄 中尾 末雄 船本 永作 船本 コノ 大辻 和兵衛 大辻 熙子 石田 文枝 大藤 淑枝 杉浦 礼子 杉山 滋子 土肥 枝美子

藤井 サツキ 三井 文子 原田 晴一 渡実 福 渡シゲ 都築 マキ子 奥田 ハル 米田 正 久保 袈裟吉 池下 一雄 池下 シマ 稲田 秀子 山中 佐吉 山中 テル 山中 小二郎 山中 政子 相川 弘

山内 正夫 末広 末松 中島 三栖雄 芳賀 常男 里シチ 稲田 東始 中村 峰子 臼井 武雄 臼井 光雄 都築 米吉 新道 シオ 松本 健八 松本 みとせ 八木 エン 品川 利男 永野 ノブ 城 忠夫

城朝子 西本 静世 西本 和代 西本 素行 小野 クミ 後鉄 男 水野 松江 林 利根夫 堤 久吉 田平 守雄 行藤 信子 友安 静恵 戸山 藤一 田部 光子 平山 丈夫 李 貞秀

(犠牲者名簿登録順)

平和の祈り

澤 正彦

(元小岩教会牧師
親江会だより九五号より)



主なる神よ、私たちが、いま、生きていくことを感謝します。私たちがあなたの創造された美しい世界に驚嘆し、人間の善意を信じて、いまでも希望を持って生きていけることを感謝します。

しかし同時に、あなたからいただいた命が、人間の罪のためにいたずらに破壊され、短くされた歴史が多くあったことを思い出します。

日本はあの誤った戦争が終わって、すでに四四年の月日がたっています。が、被爆のとき、あの戦争において、多くの人命が一瞬のうちに失われ、傷つけられたことを覚えています。

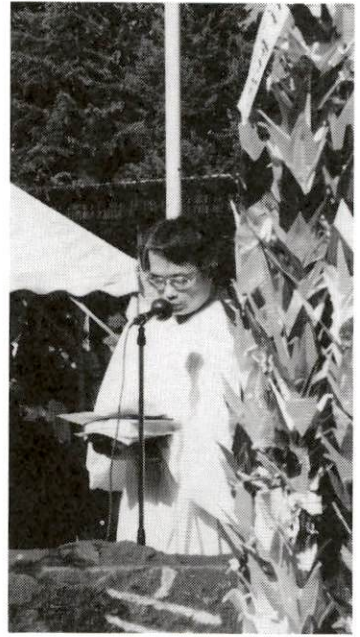
いまなお、戦争の傷を負い続けて生きなければならぬ人々を思い、あなたの赦しとなぐさめを乞い願います。

今日は、あの戦争遂行のなかで、広島・長崎の原爆で亡くなられた人々を思い、まだその傷をもって苦しみ生きている人々のために特に祈ります。何故、そのようなことがあったのでしょうか。神よ、原爆はあなたがお作りになったのですか。それとも、人間が神の領域を犯して、あなたのみむねに反して作り、用いたのでしょうか。何故、特定の人たちだけが苦しみを担うのですか。被爆

によって、家族を失った人々を慰め、いまでも被爆体験をもっておそれ生きている人々に、あなたの助けとあわれみがありますように。その人たちに人間として、日ごとの糧が与えられ、十分な治療がほどこされ、そして平和への小さな祈りと貢献ができるよう助けて下さい。

神よ、日本人と同じように、広島・長崎で被爆した韓国・朝鮮の人たちにも、これまで以上に、あなたのあたたかい手がのべられますように切に祈ります。

神よ、この追悼式にどう私たちは、被爆の経験のあるかた、ないかた、力あるかた、力のないかた、老いたるもの、若いもの、また教養や宗教・信仰も異なっておりますが、いまここに、平和を求めて集まっております。どうか、私たちを、神の



85年の追悼式でお祈りされる澤牧師

ように、

主イエスの御名によって祈ります。

アーメン

澤正彦牧師は、この三月二十七日、

あまりにも早く、多くのかたに惜しまれながら、この世を去られました。

滝野公園にある追悼碑建立の頃から、私たちに御協力下さり、毎年の追悼式で、キリスト者としてのお祈りを

されたかたです。昨年の追悼式の翌日、東大病院に入院、八月に胃全摘

の手術をして、秋には元気になられた様子でしたが、今年二月の検査で、

ガンが肝臓に転移していることがわかったのです。ガンの告知から一か

月と少しとは、あまりにもひどすぎます。

心が広く、偉大な宗教者であった澤牧師を偲んで、昨年の追悼式にお

けるお祈りをここに、収録しました。

八九年四月

(銀林記)

平和に役立つ道具として用いて下さい。

私たちに、真の信仰の道を示して下さい。被爆体験をもつ人々と、そしてそのことに関心といきどおりを持つ私たちを、平和の使者として用いて下さい。心も体も傷ついた者たちこそ、平和の使者になることができます。

私たちの日常生活の中で、再びあの戦争を賛美したりすることのない

小さな動きを監視し、これを拒否する勇気をお与え下さい。

悲しめる者、貧しき者、弱き者、疎外されている人々と手をつないで、互いに学び、愛し合い、高めあっていけるように、私たちに力を与えて下さい。

あの戦争によって犠牲になった人びと、特に被爆の犠牲によって築かれた日本の平和が、神の平和に近づくように、私たちを上げまし、導い

さようなら、田部さん

銀 林 美恵子

(親江会副会長)



田部光子さんに一言、お別れの言葉をのべさせていただきます。

田部さん、どうしてそんなに急いで行ってしまわれるのでしょうか。ご家族揃って参加して下さったあの穂高荘への楽しい親江会旅行から、まだ三か月も経っていないというのに……。

いつも若々しい田部光子さんでした。この二月に八〇歳の誕生日を迎えるとのことでしたが、とてもそんなお年を感じさせないかたでした。「おばあちゃん」と言われるのを嫌って、「孫でもない人から、そんなこと言われるすじあいはない」とよ

く言っておられましたね、田部光子さん。

あなたは丁度一五年前。被爆三〇周年を期しての募参団に加わって、広島・長崎に行って下さいました。その頃から江戸川の被爆者の会、親江会の役員としての活動に熱心に参加されました。被爆者援護法制定をめざす国会陳情や、集会にも欠かせない顔ぶれで、何ものも恐れず、げんげしい口調で主張をのべられるのが、たのもしいい限りでした。また区民館での役員会が終わると、御夫君の車のお迎えがあり、私もよく一緒に乗せていただきましたが、長い間

田部さんがどんな被爆体験をお持ちなのか、知りませんでした。

昭和五八年の二月のある日、私のところにお立ち寄り下さったあなたと、はじめてゆっくりお話をしました。あの日のショックを私は生涯忘れることができません。はじめて人に話すと言って、戦争中の話、被爆にいたるまでのこと、あの日のこと、そしてその後のご苦労と、せきをきったように言葉が続きました。何時間、話すほうも聞くほうも涙をこぼしながら時をすごしました。同じ被爆者でも、私のように自分の身一つで逃げた者と、家族ぐるみの被爆の違い、特に幼い子供をかえた母親の被爆が、想像を絶する悲惨なものであったことを、身近に感じました。

あなたは、三人のお子さんと、広

島市金矢町で、原爆を受け、子供と

もども怪我をし、家や家財道具一切を無くされました。焼け跡にトタンで囲い、残り木を拾ってのいたましい生活、やっと生き残ったと思ったのも束の間、一〇月に、みんなに原爆症が出てきて、三歳のふみ子ちゃんが亡くなったんですね。あなたは、その遺体を自分の手で焼かねばならなかった、どんなにつらかったことでしょう。二週間後には、その上の五歳のせい子ちゃんが同じように亡くなって、七歳のお兄ちゃんとお母さん二人でお弔いをしなければならなかった、この話は、忘れることができません。毎年の、追悼式での犠牲者名簿読み上げのとき、「田部ふみ子、田部せい子……」と始まりますが、私はいつも自分が出会ったことのようにその場面を思い浮かべます。

す。

第三回の追悼式で田部さんの体験をお話していただき、昭和六〇年、秋に行われた「江戸川法廷」でも、田部さんに証言をお願いしたいということになりました。その集会の実行委員長の羽生先生と二人でお宅にお願いに行き、病院から帰られるあなたを待ちぶせ、頼みました。もう人前で話すのはいやだ、と言われるのを無理に引張り出してしまいました。あの感動的な、文化センター大ホールでの法廷劇。大成功だったのは、被爆の証言をして下さったお二人のおかげです。その一人、堤さんが、一昨年、急逝され、いまた、田部さんを失うとは、何と悲しいことでしょう。もうあの江戸川法廷のような集会はできないという気がします。

でも、これからもまた、自分たちでできることを模索しながら、平和のために、被爆者の運動を続けていきます。

田部さん、天国で、ふみ子ちゃん、せい子ちゃんをしっかり抱いて、私たちの活動を見守って下さい。

田部光子さん、さようなら。

一九九〇年一月



お母さん、ご苦労さまでした

田 部 和 彦

(親江会事務局次長)



でした。日一日と衰えていく母を看るに、何もしてやれなかった自分が悔やまれてなりませんでした。

生前の母は決断力のある人で、国会請願や役員会にも参加しておりました。正しいと思ったことは、相手がだれだろうが絶対には引かない性格で、気の強いところがある反面、人に物事を頼まれると断わりきれず、人知れず悩んだりしておりました。

そんな母も、七九歳の生涯を終えました。去年の一〇月、親江会の旅行で、家族そろって穂高荘へ行った

時、写真が最後の想い出になろうとは……。



▲追悼碑の鳩の図柄のブローチを手作りする「戦争への道を許さない下町の女たちの会」のメンバーたち。和紙工芸品で、売り上げ金は在韓被爆者援護カンパに送金している。

いま寂しくアルバムの片スミにあります。
長い間、ご苦労さまでした。心安らかに眠り下さい。

友安さんの思い出

佐々木 玲子

(親江会理事)



昨年の夏、滝野公園で行われた追

悼式の前日のことです。友安さんから、「昨日、広島から帰りましたので、明日の式にはご一緒して行きましょう」と電話をいただき、当日、

席を並べてこの式典に参列しました。

その日が最後の日になるなどとは、夢にも思いませんでした。その当時、私は体調をくずしていましたので、友安さんは私に、「一日も早く病院へ行って、検査してもらいんさいよ。手おくれになるといけんけーねえ」とせき立てて下さったのに、このよう

な悲しいことになってしまわれ、友安さん自身、どんなにか残念だっ

たことでしょう。

友安さんはここ一、二年、広島のお子さまの家に手伝いに行っておられて、七月になると必ず帰って来て、追悼式には参列しておられました。

元気だった友安さんがガンにおかされ、広島病院で一月に手術され、二月には亡くなられたと聞き、本当に耳を疑い、言葉が出ませんでした。昨年の夏は、お元気で、私を心配し気づかって下さった友安さんが、まさかと思いました。

友安さんから、いろんなことを教えていただきました。国会請願にも度々行かれ、被爆者の全国行脚の時

も、冷たい風の中でがんばり、夕方からうぐいす谷駅でピラマキをしたり、二千万署名の国民運動の時もまた、署名を戴くの、夜、食事の終わった頃を見はからって、一軒一軒廻って歩かれ、中には被爆者でないから関係ないと、冷たくされる家もあるけれど、「私しや気にやあせんよ、生きちよるうちにがんばらにやあねえー」と明るく言っておられた顔が浮びます。

勝沼のブドー狩りやみかん狩りも楽しく、健康診断にも幾度となく一緒しました。心のやさしい、そして人に対して思いやりのあるかたでした。

友安さんお世話になりました。本当にご苦労さまでした。どうぞ静かに安らかに眠り下さい。 合掌

一九八九年四月

平山さん、安らかに

渡辺 和子

(親江会理事)



それにしても、六二歳とは少し早すぎると、残念でたまりません。平山さんのご冥福をお祈りいたします。

天国で安らかに眠り下さい。

平山さんが他界されました。のかたとは同じ篠崎でしたので、いつも会のことを色々と聞いていただき、私も頼りにしていました。一度、倒

れてから、体の具合が悪く、右手がきかなくなる、右足がしびれると、つい暮にもこぼしておられました。

とにかくよいお人柄で、被爆当時のこともよく聞かされましたので、

何年か前、滝野公園で話してくれませんか頼んだことがあります。自分の話などと遠慮されるのを、「体験は一人ひとりが違うのだから、きつといいと思いますよ」とすすめたのがきっかけで、追悼式での体験発

表が実現できて、本当に良かったと、感謝しています。

その他、篠崎公園の区民まつりで、水アメを売るときも、お孫さんを連れてよく来てくれました。そうして募金をしたり、果物、ビール、おつけ物などをさし入れて下さり、またそこで、冗談話がはずむ人でした。

私の家に来られても、話がはずみました。体験発表のときも、あのふみ台にあがったら、足ががたがたふるえて、と大笑いしたこともあります。一生残ることができて良かったと、お茶のみ話でいつも話題にしています。

原爆被害者援護法の即時制定を求める意見書

昭和二十年八月、広島・長崎両市に原子爆弾が投下され、一瞬にして二十一万余の尊い人命が奪われ、多くの方々が被爆されました。その悲惨な体験から既に四十四年が経過しましたが、被害は今もなお続き、多くの被爆者が放射能障害による苦痛と不安の日々を過ごしています。

さらに、最近では被爆者の高齢化も進み、病弱化といいつて、その生活不安は一層深刻なものとなっています。現在、被爆者の救済には原爆医療法及び原爆特別措置法で対策が講じられておりますが、被爆者の実情を見るとき、これら二法ではなお十分とは言えません。

よって、政府におかれては、原爆被害者の根本的な救済を図るため、すべての被害者を対象とした被爆者年金の支給など各種施策を網羅した総合的な「原爆被害者援護法」を早急に制定されるよう強く要望いたします。

右、地方自治法第九十九条第二項の規定に基づき意見書を提出いたします。

平成二年三月二十六日

江戸川区議会議長 大場 久

内閣総理大臣

大蔵大臣 あて
厚生大臣

江戸川原爆犠牲者

追悼式を知って

松川 和美

(主婦)

葛西区民館前の滝野公園で開かれる原爆犠牲者追悼式を知って、もう何年になるでしょうか。知人から追悼式での千羽鶴献納の話聞き、当時、娘の小学校でPTA委員をしていた私は、さっそく学年活動の一つとして提案してみました。学校教育の中でも、戦争に関する学習はされていますが、母親として、絵空事ではない戦争を知る機会を子供とともに得たいと思ったからです。ただ、こうした母親の思いを理解してもら

える程、現在の教育現場は、甘くはなかったのです。

千羽鶴の呼びかけのみは許可されたものの、学校施設の使用は許されず、校外活動を余儀なくされ、あくまでも父母が主体の千羽鶴作りでした。子供が四年生のときから始めたこの活動も、年毎に条件が厳しくなり、六年生の時には、ついに娘と私の個人の献納となってしまいました。けれど、あの最初のふざけいかな千羽鶴に込められた子供たちのそれぞれの思いが、夏のある日、蘇みがえることを信じています。

それにしても、教育現場の複雑な立場の違いの主張は、理解し難いものです。追悼式に参加もせず、かたくなに守ろうとしているものは、何なのでしょう。

毎年語られる被爆者の方々の証言

■第9回・江戸川区

原爆犠牲者追悼式

区立滝野公園に原爆犠牲者追悼碑がある事をご存じでしょうか。亡き犠牲者への追悼と平和への願いを込めて、昭和56年に建立されました。また昨年は江戸川区の手により、追悼碑を囲む大きな噴水が設置されました。今年も江戸川区長にご臨席頂き、7月23日に式典が行われます。

日時 7月23日(日) 午後1時30分
場所 区立滝野公園(葛西区民館隣り)

犠牲者への追悼と平和への願いを込めて 千羽鶴を..

これこそ、幼稚園・保育園・小中学校単位でまとめて下さっていますからに輪が広まって地域の子供会や、サークル、グループまた、各ご家庭でも子供達にどの意味を話してあげながら折って頂けるようになる事を期しています。

千羽鶴のサイズや長さには決まりはありません。どんなものでも自由に折ってつなげて下さい。

●連絡先 江戸川区原爆犠牲者追悼碑の会
652-9428 岡田

▲地域へのPR (そよかぜ回覧板から)

の中で、ある人は、幼な心に原爆の恐ろしさをまのあたりにして、「大人たちは、一体何をしていたのだろう」と思ったといわれました。ある人は、「今日まで辛く、苦しい思いをしました、それはもう仕方がない。私たちのことは、もういいのです。それよりも、これから生きてゆく子供たちの将来に、二度とこんな

恐ろしいことが起きないようにお願いしたいのです」と、トットと語られました。

今年もまた、犠牲者追悼式が近づいています。語ることさえ辛い体験を、幾度もためらいながら、意を決してマイクの前で語られるという被爆者の方々の声を、私は聞き逃さなようにしたいと思います。

原爆がおとされたことを 風化させてはならない

松岡 優

(親江会理事)

一台のトラックが避難民を荷台にのせて砂煙りを上げて走る光景は、

戦争映画などでよく観られるシーンだ。

カンヌ国際映画祭グランプリの榮譽に輝いた「黒い雨」という映画にも、トラックのシーンがあった。原爆の落ちた当時、一民間人が自動車で移動出来たかどうか、軍用ならばありえたかもしれないが(いや軍用でも松根油とかヒマシ油にて飛行機などを動かしたと子供のころ聞いて

いるが)、はたしてガソリン車を運転していたかどうか、私は今でも不思議でならない。戦後いくどとなく原爆に関する映画が上映されて来たが、前記のシーンを観て、長い年月で多少であれ風化されたのではないかと疑問に感じたのは私ひとりだろうか。

NHKで放送された「核の時代」の中で、原爆投下は日本に対する戦争終結ではなく、対ソ戦略にもちいられたとか、また他国への干渉のため広島・長崎市民が殺りくの材料になったとか、また戦後、何年間も原爆報道に管制が敷かれたとか、知って、ただあぜんとするのみである。

このことはうそであれ、真実であれ、原爆がおとされたという事実は永久に風化させてはならないことである。

戦争責任 なぜふれぬ

広島原爆資料館、平和記念館

NEW YORK TIMES INTERNATIONAL THURSDAY, APRIL 8, 1994

At Atomic Shrine, All the Horror, No

By STEVEN A. WEISSMAN
Special to the New York Times



「核の聖地は恐怖ばかりで、罪悪感はなく」と題したNYタイムズの記事

「核の聖地は恐怖ばかりで、罪悪感はなく」と題したNYタイムズの記事

「核の聖地は恐怖ばかりで、罪悪感はなく」と題したNYタイムズの記事

「核の聖地は恐怖ばかりで、罪悪感はなく」と題したNYタイムズの記事

「核の聖地は恐怖ばかりで、罪悪感はなく」と題したNYタイムズの記事

「なぜ原爆資料館と平和記念館は、日本の戦争責任について触れていないのか」——四月十九日に発売された米紙「ニューヨーク・タイムズ」は、数年前から論議されている同館の「戦争コーナー」設置問題を取り上げ、とくに侵略戦争との関連を忘れ、被害者としての面のみが強調されがちな日本の平和行政に疑問を投げ掛ける記事を掲載した。

広島市では現在、原爆資料館と平和記念館が整備・改修のため工事中。だが、工事が始まる数年前から、

「ストップ・ザ・戦争への道」ひろしま講座(宗像基代)などの市民団体やキリスト者が、広島は戦前の

「核の聖地は恐怖ばかりで、罪悪感はなく」と題したNYタイムズの記事

NYタイムズが批判記事 「右翼に屈した市長」

さらにワイスマン支局は、両館について「感動的で雄弁ではあるが、多くの訪問者は、原爆投下で日本のアジア侵略戦争を終わらせたのだという説明がないことに驚くだろう」と指摘。そのうえで戦争責任について日本の指導者が自覚を持たず、また天皇の戦争責任を語った被爆地・長崎の市長が右翼に追撃された事例などを紹介しながら、最後に「戦争責任を認めることに反対する日本人が多い。今でもこの国では、大多数がこの問題について無関心だ」とする市民団体のメンバーの発言を締めくくっている。

会	そ の 他
・銀林美恵子	除幕式
・銀林美恵子	「人間を返せ」「予言」上映。『鳩になって・第1集』発行。 「原爆瓦」碑建立。
・堤 久吉	「おこりじぞう」上映。山口勇子講演。『原爆の図』展。発言（東京空襲の会・橋本代志子、江戸川高校・谷地田道子、第5葛西小学校・加藤貴郎）
・篠原 久子	『鳩になって・第2集』発行。「トビウオのぼうやはびょうきです」「もし、この地球を愛するなら」上映。発言（葛西南高校、被爆2世・堤英樹）
・中山 鈴子	「広島・長崎の木」植樹。発言（石川逸子、葛西工業高校）。安楽寺で交流集会。
・中山 鈴子	「はだしのゲン」上映。発言（被爆2世・川崎加寿子の詩を田部季之朗読）。『江戸川法廷記録集』発行。
・猪俣 治子	「ヒロシマ・ナガサキー核戦争のもたらすもの」「ピカドン」上映。発言（被爆2世・中山美里・小5、吉村博光・高3）
・松川 和美	「噴水」建立。交流会。被爆写真パネル展示。発言（江戸川高校・小池清他）。『堤久吉さんを偲ぶ』発行。
・松川 和美	「ひろしまのエノキ」「遺言」上映。パンフ「イルボンサラムへ、何故？ 何故？」発行。発言（江戸川高校・河野玄）
・葉山 洋子	『鳩になって・第3集』発行。「黒い雨」上映。平和コンサート。灯ろう流し。被爆者が描いた絵画（市岡英史氏）・資料展。

★ 江戸川原爆犠牲者追悼式10年（1981～1990）

回数	年 月 日	証言者（広島・長崎）	名簿奉読者	司
第1回	'81 / 7 / 26	矢部キヨ子・中山 鈴子	臼井 武雄	羽生 雅則
第2回	'82 / 7 / 25	佐々木玲子・堤 久吉	中山 鈴子	羽生 雅則
第3回	'83 / 7 / 24	田部 光子・渡辺 和子	野村 寛一	杉原 博子
第4回	'84 / 7 / 22	野村 綾美・平山 丈夫	本田 孝夫	堤 久吉
第5回	'85 / 8 / 4	銀林美恵子・中尾 嬢二	佐々木玲子	岡田 弘隆
第6回	'86 / 7 / 20	西本 宗一・吉村美智子	高木 留男	野村 寛一
第7回	'87 / 7 / 19	本田 孝夫・堤 晶子	小林 懋	野村 寛一
第8回	'88 / 7 / 17	後関 和雄・杉本キヨ子	本田 孝夫	加藤 進
第9回	'89 / 7 / 23	松谷 幸江・久保 亨	田部 和彦	加藤 進
第10回	'90 / 7 / 22	田辺 和彦・戸山真寿美 辛 泳 洙（韓国）	加藤 進	西本 宗一

第3回 江戸川原爆犠牲者追悼式
 7月24日(日) 午後1時30分より
 江戸川区立滝野公園(葛西駅徒歩5分・葛西区民館隣)
 式後、葛西区民館ホールで「おこりじろう」を上映します。

主催 江戸川原爆犠牲者追悼碑の会 (03)5704-2725
 後援会 (03)571

江戸川 平和のための 原爆・戦争展

■ 7月24日(日)午後1時～6時
 葛西区民館ホール・ロビー
 ■ 7月26日(火)～28日(木)午前9時～午後9時
 江戸川文化センター2階ギャラリー
 ■ 入場無料 子どもたちと一緒にぜひ参加を

主催 親江会(江戸川原爆被害者の会) (03)5704-0558 (03)571




7月22日(日)
 被爆45周年・江戸川区原爆犠牲者追悼式
第10回 江戸川原爆犠牲者追悼式

会場 江戸川区立滝野公園(葛西区民館となり)
 江戸川原爆犠牲者追悼碑(1-12-1)
 時間 午後1時30分から

主催 江戸川原爆犠牲者追悼碑の会 (03)5704-2725
 後援会 (03)571

第2弾 江戸川 平和のサト

主催 江戸川原爆被害者協議会
 江戸川フィルム・ビデオ・センター・サト
 絵巻館等 オープン・ミュージアム

会場 コール・ジュニア、K・ウイキ・ス・コール
 コール・ルナ、コール・ユウフ
 江戸川少年少女会館等
 葛西区民館ホール 午後4時～6時

第3弾 灯が流し
 (03)571
 葛西区民館前 葛西1号公園内にて

7月21日(土)
 午後5時から
 映画上映 **黒い雨**
 今村昌平監督作品
 文芸春秋映画
 葛西区民館ホール

7月20日(金)～22日(日)
原爆絵画・資料展
 『広島被爆画家 市鶴英史全作品展』
 会場 葛西区民館3階
 さあ観てみ 親子でどうぞ！

第6回 江戸川区 原爆犠牲者追悼式

とき 61年7月20日(日) 午後1時30分
 ところ 滝野公園(葛西区民館となり)
 主催 江戸川原爆犠牲者追悼碑の会
 后援 江戸川原爆被害者協議会(03)571-1111 03)5704-2725

午後5時30分より、葛西同区民館ホールで
 長編アニメ映画「はだしのゲン・第一部」無料上映！






河野市河渡
上野区立美術館蔵 河野市河渡の肖像画
河野市河渡は、昭和14年（1939年）に上野区立美術館蔵の肖像画が完成した。河野市河渡は、昭和14年（1939年）に上野区立美術館蔵の肖像画が完成した。河野市河渡は、昭和14年（1939年）に上野区立美術館蔵の肖像画が完成した。

89年の追悼式での配布資料



下町反戦露路裏
平和行進の出発式



追悼式での被爆
二世の発表

映画 黒い雨

7月21日（土）午後 5時半より
東西区民ホールにて、参加協力券 500円

この映画は、原爆投下から40年たった今、日本人の心に深く刻み込まれた、悲劇の物語である。原爆投下から40年たった今、日本人の心に深く刻み込まれた、悲劇の物語である。原爆投下から40年たった今、日本人の心に深く刻み込まれた、悲劇の物語である。



被爆者が描いた絵画・資料展

7月20日（金）21日（土）午後 入場無料
東西区民ホールにて、参加協力券 500円
被爆者が描いた絵画・資料展
被爆者が描いた絵画・資料展
被爆者が描いた絵画・資料展



7月20日（金）	21日（土）	22日（日）
通 過 式	通 過 式	通 過 式
平和コンサート	平和コンサート	平和コンサート
平和コンサート	平和コンサート	平和コンサート
平和コンサート	平和コンサート	平和コンサート

主催 江戸川原爆犠牲者追悼碑の会
江戸川区東小松川2-7-17 泉福寺内
TEL 652-9428

第10回江戸川原爆犠牲者追悼式と平和の集い

1990.7.22（日）



第1部 追悼式 午後2時～3時（1時開場） 東西区民ホールにて、参加協力券 500円
第2部 江戸川平和コンサート 江戸川区民ホールにて、参加協力券 500円

江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート



江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート
江戸川平和コンサート

第3部 灯ろう流し 午後6時30分～7時30分
東西区民ホールにて、参加協力券 500円



あとがき

▼追悼碑の会の一〇年をふりかえる機会をえました。碑と追悼式を支えてこられた多くの方々や団体のお名前を記すべきでしたが、字数の関係で割愛せざるをえませんでした。何卒ご理解のほどお願い申し上げます。
(岡田)

▼一〇年を振り返り、なつかしい故人の方々を思い浮べ、また、この会の広がりを感じました。被爆者は日本人だけではありません。今号で、初めて韓国の被爆者証言も収録できて、嬉しいのです。なお一層の広がりを。
(銀林)

▼編集作業を進めているさなかの七月二日、チェルノブイリ事故で決死の消火活動に当ったヘリコプター操縦士アナトリ・グリシェンさんが、米国のガンセンターで白血病のため亡くなられたというニュースを聞きました。被爆は四五年前のことではなく、いまでも続いています。核は恐ろしいものです。
(西本)

▼「われわれは、核戦争のただ中に生きていることを実感せざるをえない。しかし、世界の多くの人々は、原水爆の破裂が戦争だと誤解している」という、ウラン採掘場に生きたワピッパさんの声を聞いてほしい。
(小田)

鳩になって

—江戸川・被爆者の証言第3集

一九九〇年七月二二日発行

編集・発行／江戸川原爆犠牲者

追悼碑の会

代表・浄園満成 名取盛雄

編集委員／岡田弘隆 羽生雅則

銀林美恵子 西本宗一

小畑精武 佐々木承定

小田美智子

発行所／東京都江戸川区東小松川

二ノ七ノ一七

追悼碑の会事務局

〒六五二・九四二八

印刷所／東京都中央区八丁堀

三ノ一四ノ六

株式会社 三洋印刷

〒五五二・〇七三八